

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

[特集] 保育の「根本考察」にチャレンジ!

「暮らし」の視点で保育を見直すー「コロナ」と保育

[実践] 保育をつなぐ

新しくつくる ～ 新型コロナウイルス
感染予防の中での日常 ～

[視点] 論考

子どもには密が必要

2020
}
2021

冬

since 1901

第120巻 第1号

お茶の水女子大学

『幼児の教育』編集委員会

それぞれの園のための 就業規則

コンプライアンス・内部統制・マネジメント

著 / 安岡知子
(人財コンサルタント・特定社会保険労務士)
監修 / 桑戸真二 (株式会社福祉総研)

園で問題となる
労務の話題をほぼ網羅！

「時間外労働」「有給休暇」「休職と復職」など、
身近な課題への解決の道筋をわかりやすく解説。
園の「働き方改革」を検討する際にも役に立つ
1冊。

それぞれの園のための 就業規則

コンプライアンス・内部統制・マネジメント

安岡知子 (人財コンサルタント・特定社会保険労務士)
監修 / 桑戸真二 (株式会社福祉総研)

園で問題となる
労務の課題を
ほぼ網羅



「時間外労働」「有給休暇」「休職と復職」など、
身近な課題への解決の道筋をわかりやすく解説。

定価本体 1,800 円 + 税 全 80 ページ
26 × 18cm 109-86 ISBN978-4-577-81473-4

法令の条文解説ではなく、
事例を通して、無理なく理解できます

Point

各項目、園からの具体的な「困りごと」事例に対して、
著者が解決策を「ご提案」します。

目次

- 第1章 労働時間を考える
- 第2章 休暇を考える
- 第3章 人材育成を考える
- 第4章 非正規職員について考える
- 第5章 休職と定年を考える

Point

著者は園での管理職経験があり
ます。顧客から相談の多い、園
ならではの課題を集めました。

Point

図表やマンガを用いながら、
課題になっている状況をイ
メージしやすくしました。

2 年次有給休暇、働き方改革でどう変わる？



年次有給休暇の 改正と取組

年次有給休暇の改正は、労働者保護の観点から、労働者の権利を確保し、働き方改革の一環として、働き方改革の推進に資することを目的として、改正が行われます。改正は、労働者の権利を確保し、働き方改革の推進に資することを目的として、改正が行われます。

労働者	改正前	改正後	労働者	改正前	改正後
1000	1100	1200	1400	1600	1800
1500	1600	1700	2000	2200	2400
2000	2200	2400	2600	2800	3000
2500	2700	2900	3100	3300	3500
3000	3200	3400	3600	3800	4000
3500	3700	3900	4100	4300	4500
4000	4200	4400	4600	4800	5000
4500	4700	4900	5100	5300	5500
5000	5200	5400	5600	5800	6000

改正は、労働者の権利を確保し、働き方改革の推進に資することを目的として、改正が行われます。

改正は、労働者の権利を確保し、働き方改革の推進に資することを目的として、改正が行われます。

改正は、労働者の権利を確保し、働き方改革の推進に資することを目的として、改正が行われます。



ここはどこ？

いつもの場所が すっかり変わった！

ここは ほんとうに どこなの？

子どもの情景

写真

子どもの情景

1

目次 まど

春を待ち、春を思う

2

特集

保育の「根本考察」にチャレンジ！ 14

「暮らし」の視点で保育を見直す

― 「コロナ」と保育

4

《座談会 2020》

今、大切にしたい私たちの「暮らし」

5

《アーカイブズ》

― 二月の衛生―

― 『幼児の教育』第42巻第1号
(1942年) から―

20

実践

私の保育ノート

変わっていくこと

興梠侑

22

保育をつなぐ

～ お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ～

Vol.8

新しくつくる～ 新型コロナウイルス

感染予防の中での日常～

佐藤寛子

26

連載

子ども学の窓から

これからのチャイルド・スタディーズを展望して

見つけて・驚いて・気づいたことから始まる保育

④

宮里暁美

32

視点

子どもには密が必要

仙田 満

36

生活文化と「お花屋さん」

松山 誠

40

目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある
スタンドグラスの模様をデザイン化したものです。

視点

シンガポールでの季節感と伝統行事

富田裕香

44

文化

鎌倉おもちや屋物語 その8

黒須和清

49

探究

子どもたちは認定こども園において

夕方の時間をどのように過ごしているのか？
～環境と空間に焦点を当てた参与観察による
事例分析から～

杉山沙旺美

61

目録

『幼児の教育』令和2年総目録

62

子ども学のおは

イベント・メディア情報

読者投稿・編集後記 他

63

まど

春を待ち、春を思う

季節の巡りに励まされた日々を超えて、まもなく新しい春がやって来る。新しい春を待ち、新しい春に思いをはせながら、今号をお届けします。東京オリンピックが開催され、世界中の注目が集まり感動のドラマが繰り広げられると誰もが思っていた令和2年は、想像もしない展開になった。思いがけない事態に混乱し、それでも鳥は鳴き、花は咲いた。夕立の後にはきれいな虹がかかり、空を見上げると心が晴々とした。季節の巡りは私たちを励まし、前へ前へと押し出してくれる。

『幼児の教育』は今号より120巻となる。長い年月の中には、震災や戦争、スペイン風邪など、大きな困難や災害に見舞われた時期もあった。私たちの日常は常に困難と隣り合わせなのだから。そのような中でも本誌は「子どもが育つこと」への揺るぎないまなざしをもち続け、「子どもを育てる保育者たち」へのメッセージを送り続けてきた。リモート座談会では新型コロナウイルスへの対応の重点に日独の違いがあることがわかった。それぞれの「今」を重ね、「同じ」と「違う」の両方に気づく。実践を重ね学ぶ楽しさがここにある。子どもに視点を置き語りあう在り方を基盤にして、これからも歩み続けていきたい。(宮里)

特集

保育の「根本考察」

にチャレンジ！14

今から約1世紀前、倉橋惣三が本誌にこう書いた。「根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつでも枝葉の處で動いて居る。(中略)——我國の幼稚園教育界は、こんな風にして一年々々過ぎて居るのではあるまいか。」(「斯くてまた暮れゆく」大正5年12月)……倉橋がもし今生きていたら、現代の幼児教育界をどう見るだろう。倉橋先生、私たち根本考察できていますか？

「暮らし」の視点で 保育を見直す —「コロナ」と保育

今年度は「暮らし」を彩るいろいろなテーマで語りあうことで保育を見直していきます。冬号のテーマは「コロナ」と保育です。新型コロナウイルスが世界中に広がる中で、子どもたちの暮らしをどうつくっていくか、変わらざるを得ないものと変えてはいけないものの中で保育が営まれています。「コロナ」と保育について考えてみたいと思います。

CONTENTS

座談会 2020

今、大切にしたい私たちの「暮らし」

アーカイブズ

「一月の衛生」

— 『幼児の教育』第42巻第1号(1942年)から —

座談会 2020

今、大切にしたい 私たちの「暮らし」

ベルガー有希子
浜口順子
松島のり子
上坂元絵里
菊地知子
宮里暁美(進行)

宮里 新型コロナウイルスの感染拡大によって世界中が混乱の渦に巻き込まれています。医療関係の方々の努力でワクチン等の開発が進められていますが、収束の見通しは立っていないように思います。ウイルス感染防止のためにさまざまな変化が求められ、変わらざるを得ないものが多くあるように思います。と同時に、どのような状態であつても大切に

したい「暮らしの在り方」があるようにも思います。そこで、今回の座談会のテーマを「今、大切にしたい私たちの『暮らし』」としました。感染防止のため、リモートで開催します。リモートの良さを活かして海外からホットな情報を寄せたいと思います。と企画しました。ご参加くださるのはドイツで幼稚園教諭をされているベルガーさんです。

ミュンヘンで保育者として生きて

ベルガー ドイツのミュンヘンに住んで32年



ベルガー有希子 (Haus für Kinder 幼稚園教諭)
松島のり子 (お茶の水女子大学)
菊地知子 (お茶の水女子大学附属いずみナーサリー主任保育士)

浜口順子 (お茶の水女子大学)
上坂元絵里 (お茶の水女子大学附属幼稚園副園長)
宮里暁美 (文京区立お茶の水女子大学こども園園長)

目になります。子育てをする中でファミリーセンターとかかわり、子どもが3歳を過ぎるときにスタッフとしてかかわらせていただきたいのが、ドイツにおける保育の始まりでした。その後、ミュンヘン市の公立幼稚園に勤務し、17年になります。

私の勤務園は Haus für Kinder (「子どもの家」)です。3〜11歳を預かっている施設です。ドイツは小学校が1年生から4年生まで^注なので、園内に小学生の放課後を見る学童施設があります。職員の数、幼稚園が10人、学童が8人、実習生4人、キッチンが3人。職員も子どもたちも多国籍で、幼稚園は在園児が44人いますが、二十数か国の出身です。私の地域が特別なのではなく、ミュンヘン市としてそういう感じ です。

本園の特徴は、①インクルージョン・インテグレーション。目の前にいるその子をそのまま受け入れましょうという保育。②子どもの

身体的発達(運動・健康)を大事にする。③自然と触れあい自然の中で遊ぶ経験を積む、の三つがあります。

宮里 ミュンヘンの幼児教育施設における公立と私立の割合はどんなですか？

ベルガー 園の数としては私立園のほうが多いのですが、私立は10人など少人数の園が多いため、幼児数は同程度です。私立は教会立をはじめ福祉団体施設、シユタイナー園、森の幼稚園などがあります。

保育内容の紹介① 異文化理解教育の様子

ベルガー はじめに、異文化理解教育についてお話ししたいと思います。いろんな国籍の子どもがいるということで、それぞれ自分の国に誇りをもって育つことができるようにしています。その子がグラウンドにもつ文化を大切にしているという意味があるのです。家庭ではなるべくドイツ語を使わないで、と



指導しています。ドイツ語は幼稚園でサポートするので、家庭ではそれぞれの文化を大事にしてね、という教育なんです。

左の写真はその様子です。この日はトルコ人のお母さんに来てもらってトルコの話をしてもらいました。お母さんが話している間、その子は自信満々な表情です。友達との自国の

話につながったり、その子の居場所ができて交流ができたりするきっかけになるように、時々保護者と呼ばれるとその国の紹介してもらおうという活動をしています。

保育内容の紹介② 人形劇を見せている様子

ベルガー 左下の写真は人形劇を見せているところです。日本という紙芝居みたいな感じで、紙芝居の代わりによく人形劇をします。最近ではドイツでも紙芝居が広がってきました。面白いのが紙芝居の入れ物で、日本のものと違ってドイツの紙芝居の入れ物は、後ろがふさがっているんです。一枚目の表紙を取るとその表紙に書いて話があるので、それを読ん



て徐々に緩和され7、8割が戻り、7月1日から全面的に戻っています。ただし家庭の判断で家に留まる子どももいます。

そういう経過の中で、先ほどのエチケットのポスターが貼られました。できなくなった



ことがたくさんあって。お母さんたちはお迎えお見送りのときにエントランスまでしか入れなくなりました。

浜口 玄関やお部屋に入れなくなったのですか？ 外で待っているということ？

ベルガー 1メートルまでは入ってもよいんです。そこに二つ大きい机が置いてあって、ひもが掛けてあって、そこからは入ってはいけないということになりました（上の写真）。マスクは着用必須です。

今後のことでは、慣らし保育が大変になると思っています。ドイツは9月が慣らし保育。今までは、慣らし保育のときに、お母さんにも室内に入ってもらうことが2、3日あったのですが、それがまったくできないので泣く子どもが多くなるかなと。

宮里 日本では4月入園が6月にずれ込み、3密を避けるため分散登園が始まりました。これがなかなか良かったです。今までは一度

に全員が来るようにしていたのですが、こちらのほうがいいよね、と。コロナでやむを得ずやったことの中で良かったこともあるよね、という声が上がっています。

変わったこと、マイナス面とプラス面

上坂元 コロナのことが起きて変わったことをもう少し聞かせてください。

ベルガー 歌を歌っちゃいけないんです。歌は外で歌う。集まりのときの歌が禁止されました。クッキング保育も禁止。お泊まり保育も5人部屋の2段ベッドで寝るのでそれもダメという事です。できなくなったことが多いです。

プラス面としては小さいクラス運営になったこと。今までは22人で1クラスだったんですけど、3クラスに分けたので、1クラス14~15人のクラスになりました。登園しない子もいるのでこじんまり。子どもにも保育者にも好評で、このぐらいの人数だったら良いよ

ねと。15人を大人2人で見るので人数的にも余裕があるし、子どもも落ち着いて活動ができる。一部屋に留まるけれど、充実した活動ができるのが良いよねという発見でしたね。そこが変わりました。

宮里 食事のときに配慮されていることはありますか？

ベルガー ビストロという食堂に行つて自分の好きなだけ自分のお皿に盛り付けて食べる方法が禁止になりました。部屋でそれぞれ食べて、保育者が「いっぱいいる？ 少なくともよい？」と量聞いて、保育者がお皿に盛り付けるということを6月中はやっていました。だんだん大丈夫かなという雰囲気が出てきて、今は元の状態に戻っています。それぞれの座った机にご飯やヌードルや主菜が大皿で置かれて、子どもたちが順番に自分でよそって食べるということになってきました。

宮里 食事の仕方については、なかなか課題

がありますよね。マスクはどうですか？

ベルガー マスクはしなくてよいです、幼稚園では。表情が見えるほうが良いという理由でミュンヘン市ではマスクは奨励しないというところで、子どもも保育者もマスクをしていません。幼稚園を一步出るとマスクをしないとけないのですが、園内は異空間のようで、今までのように普通の状態でよいのかなという感じになっています。

宮里 ベルガーさんの人柄でということではなく、ドイツはそんな感じということ？

ベルガー そうです。ドイツはそんな感じですよ。

宮里 日本では消毒を徹底して行っています。消毒はされますか？

ベルガー 消毒は一日2回、10時頃と帰りの17時に、担当者を決めて、必ずするようにしています。ただ、おもちゃまではしなくていいです。机とドアノブを中心に、ですね。ミュンヘン市の

スタンダードに従って行っています。

菊地 日本は手洗いを重視していて、ナーサリーでは、入室時に必ず保護者にも子どもにも手を洗ってもらっています。ドイツでは、手洗いは必須ですか？

ベルガー 初めて手洗いを教えました。ハッピーバースデーの歌を2回歌いながら指の間と爪の間を洗う。3月初めに子どもたちに教えて、今も子どもたちはハッピーバースデーを歌いながら手を洗っています。手を洗うのは、トイレに行った後。それ以外はそんなに厳しい目で見ているわけではなく、「(手を洗いに)行こうね」という呼びかけをして、行く子ども行かない子もいるという毎日です。ごはんとおやつの前と、トイレの後には、石けんで手を洗うようにしています。

ナーサリー、幼稚園、こども園での取り組み

菊地 ベルガーさんたちの取り組みと重なる

部分と少し違う部分があるのかなと思って聞いていました。私たちはドアノブや机などだけでなく、おもちゃも毎日消毒しています。いざ保育になれば、保育は基本的に密接が基本ですし、以前と同じように歌も歌ってるしダンスもしているし、クッキングもしています。ただ、それらは、ミュンヘンと異なり、保育者が原則マスクをするからできる、という面もあると思います。

ドイツでは0、1、2歳児の保育は、3歳以上と異なり歴史的にあまり古くはないですよね？

ベルガー 育児給付金の制度があるので、1歳前に来る子は少ないですね。

菊地 ベルガーさんの園にはいろいろな国の方がいらつしゃるということをお聞きしました。本来は私たちのナーサリーも留学生のお子さんの受け入れが大きな使命としてあるもので、保護者に留学生が多かった時期もありま

したが、今はいません。本人は学生で日本にいるけれど、コロナのため、ナーサリーに入る予定だった子どもを日本に呼び寄せられないでいる方などもいて、現在は日本人オンリーの園になっています。役割が果たせていない感じがあります。多様であることが、大変だけどうらやましくもあるなと思いました。

上坂元 幼稚園では、小学校以上に準じてということが多かったので、休むことに関して戸惑いが大きかったです。3月が突然お休みになって、卒園式も該当の5歳児だけ来て、縮小して行い、区切りだけがついたのかなという感じでした。4月、5月はお休み。その間に家庭と園がどんなふうにつながるかをいろいろ考えました。電話での一言面談をしたり、郵送で手紙やちよつとした教材を送ってやりとりしたり、つながる部分を大事にしました。情報を動画等で上げること始まり、さまざまなことが怒涛のように流れ込んできた3か

月だったと思います。

宮里 園が再開してからは？

上坂元 保育者はマスクをしているけれど、それ以外、園の中の生活は大きく変えないで過ごしてきました。半数ずつ一日置きに来るという形で1学期はほぼ分散登園でいきました。一日だけ5歳児が全員来てお弁当を食べたのですが、全員で来る生活が始まると落ち着かなくなりました。人数が減って穏やかに過ごせた部分もありつつ、この後、30人1クラスの規模に戻っていくところが、どうつながっていくか、夏休み明けの課題になりそうかなと。

全般的に、やむを得ず変えることに対して、幼稚園の教員は柔軟性があるから、「やるしかないよね」と捉えることで新しい良さが見えてきたり。前向きにやる中で、新たな発見をしながらやってきました。マイナス面はこれから見えてくるのかなと思つてるところです。

宮里 こども園はずっと園を開いてきまし

たが、少人数の保育を重ねる中でいろいろ考え、気づいたことがあります。園にいる人もいれば家庭にいる人もいる。園を開け続けている園もあれば閉じる園もある。外側から見える状況は大きく違うのだけれど、向きあっている方向は同じだと気づきました。それぞれの在り方でみんな最善を尽くしているのだと感じながら、目の前の子どもたちと過ごしていました。体調管理、消毒、3密を避ける工夫を重ね、あとは普段通りに過ごしました。5月にこいのぼりを飾ったら、心が晴れ晴れとしたことを思い出します。当たり前の日常は変わらずここにあり、と実感できると心が安定すると思いました。

これからの暮らしへの思い

宮里 ウイズコロナという言葉もありますが、これからの暮らしについて考えを交流できた

らと思います。ベルガーさん、ミュンヘンの小学校はどのような感じですか？

ベルガー 小学校は分散登校です。1週間はクラスの中のAグループが行って、次の週はBグループが行く。この隔週の分散登校が始まったのは6月半ばから。それまではオンライン授業でした。7月いっぱいまで夏休みなのですが、実質2週間しか行っていないのです。

宮里 日本では夏休みが短くなるケースも多いです。そういうふうにはなりませんか？

ベルガー まったくないです。夏休みは夏休みで予定しています。

宮里 今は日常に戻ったという感じですか？

ベルガー まだみんな警戒しています。バイエルン州全体で毎日100人ぐらいの感染者がいるので。その上今から夏休みが始まるので、まだわからないですよ。人の移動が増えると思いますから。この時期だと、ドイツ人はバカンスでオーストリアやスペインや南の方

に行くのですが、私の周りにはみんな国境を越えたくないなので、今年はドイツ国内のホテルが満杯です。9月になっても元には戻らず、オープン保育はできないだろうという考えで職員はいるので、クラス単位の保育の中で、子どもの参画を保障する可能性を考えていかなないといけないのかなと思っています。

保育の原点に戻るきっかけに

浜口 幸か不幸か結果的に少人数保育になって保育の原点を一時見直すきっかけにもなっているのは、ドイツも日本も共通なのです。保育中のマスクを外した訳など、もう少し詳しくお聞きしたいのですが。

ベルガー 私たち自身もしたくないし、ミュンヘン市からも「マスクはしなくてよい」という通達がありました。学校でも、授業中はしなくてもよいけれど、教室を一步外に出るとしないといけないというバイエルン州の決まり

があるんです。それに従っています。そのほうが表情が見えるし、良いと思う。その代わり、歌は歌わない。飛沫を飛ばしてはいけないので。

浜口 その辺り、こども園と幼稚園とナーサリーはどうなのですか？

宮里 こども園では、送り迎いで大人が出入りするときは保育者はマスクをしていて、保育中は暑さもあるので外す場合があることを保護者にお知らせしています。

浜口 赤ちゃんは、マスクはどうしている？

宮里 赤ちゃんはマスクはしません。2歳以下はマスクをしないようにと連絡が来ています。

菊地 ナーサリーは、再開するときに、0、1、2歳は窒息や熱中症のほう怖いので、子どもにはマスクをさせないでと親に言いました。

保育者は基本的にマスクをしますが、熱中症につながりかねない呼吸の苦しさのときは外

すことがありますということも保護者に知らせています。保護者には着用をお願いしています。

上坂元 幼稚園では、園を開始するときに、熱中症の報道が始まったのです。小さい子のマスクは危ないよと言われ始めた時期に開始だったので、身体的な負担と、扱いの衛生管理が十分にできないという2点で、園内ではマスクをつけることは強制していません。交通機関を使って通園する人がいるので、電車やバスの中は子どももする人が多いのかなということで、マスクケースを一人一つずつ買って用意して、園内では二つ折りに入れておくようにしています。保育者はマスクをしているのですが、「暑くなってきたから、先生たちも自分の判断で外そうね」と話しています。

変わるって・変わってはいけないって

宮里 まだまだ先が見えない状況ですが、今

だからこそ思うことを一言ずつお願いします。
浜口 小学校以上だと、オンラインの教育の可能性は部分的にあると思います。幼児教育においても、親御さんとながるという意味はあるけれど、幼児にとってオンライン教育の可能性はとても限られていて、マイナス面への配慮が必要でしょう。

「子どもには密が必要」という仙田満先生の話（本誌P 36～39の記事参照）のように、今、子どもの成長にとって基盤となるとところが危機に陥っていることを感じます。保育の渦中にいる人たちは危機感を大きくもっていて、先の見えなさもあり、先生たちのストレスはどうなっているのかということが心配です。

松島 園としてどうするかという判断をするときに、いろいろな情報を得ながら、先生たちが判断するには、難しさが伴うのだろうなと感じました。マスクひとつをとっても、感染症予防で国から配られるぐらいなので、毎日

してはいるけれど、保育をしていく中では、子どもたちにとって表情が見えるようにしたいという思いがあり、暑さの中では熱中症の心配もあります。感染症の予防も必要だけれど、熱中症も心配、そして子どもとのかかわりも大切。何か大切にしたいものがあるからこそ判断が難しくなることがあるのではと思いました。〃してはいけない〃控えましよう〃というとき、誰が何によってそれを判断するのは簡単なことではないと思います。いつ何がどのような形で起こるかわからないと思うと、これからに向けて、今だからこそ振り返りつつ考えていくことも必要なのかなと考えます。

ベルガー コロナで大変ですが、このようなオンライン座談会の機会を頂けたのはコロナのおかげなので、良いこともあるのかなと思います。このような時期だからこそポジティブに考えることも大切ですね。

もう一つ良かったなと思うことに気づきました。クラスを三つに分けるときに、「自分と気の合う保育者」「自分と気の合う子どもたち」を重視して作ったんです。もちろん子ども同士の関係については一番尊重しましたが、そうすることでストレスが結構少なくなりました。叱る割合が少なくなつて穏やかに温かいまなざしで保育ができるようになったなと思います。子ども同士のいさかきも減りました。ストレスが減少して、そこが良かったかなと思います。

宮里 ストレスが減少したのですね。

ベルガー 職員にとつても子どもたちも雰囲気が良いとストレスが少なくなります。

菊地 危機感、心配は変わらずありますが、6月に子どもたちや保護者に実際に会えたことは何よりもうれしいことでした。これからも、マスクの着用や消毒など、いろいろ気をつけながらではあるけれど、ゆるゆるとのんきで

楽しい毎日を重ねることが子どももの力になっていくという実感があります。のんきに笑いあう、悔しくて泣きあうといったような、本当に当たり前の生活をいかに重ねていけるか。この局面においてもとても大事なことでないかと思っています。

上坂元 鬱々としてしまうような生活の中で、在独のベルガーさんとも距離を超えて話が出てきてありがたかったです。今、対話の大切さが言われますが、保護者ともちよつとしたことと話をすることで、親から逆に励まされることも多くあつて、この出来事も悪いことばかりではないなと思います。七夕の笹飾り作りでものごく細かく網を切ろうとする年長児の真剣な目を見ると、そういう場がしばらくなかったのだからうな思つたりしています。大切なことを、ちよつと細くなつたり太くなつたりするのかなとは思うけれど、脈々と続けていけるように。



▲中央に花台を置き広くなった机で食事をする。
(こども園3歳)

どうしようかと考えました。机と机の間を開けてみても落ち着かなくなったり大声で話すようになったりして、逆効果になってしまったのです。そこで

教員のストレスについては、すべて0から考えることばかりになっていて、先生たちには負担が蓄積しているのだろうと思いますが、夏休みを挟んで前向きにつながっていかれればと思います。

宮里 今こそ知恵やユーモアを発揮するときなのかもしれないですね。こども園の食事場面でソーシャルディスタンスを保つためには

知恵を絞り、机と机の間にもう一つ小さな机を置き、そこに花を飾ることにしました。そうすると子どもと子どもとの距離も離れるし、食卓の雰囲気も良くなるという感じになりました。新型コロナウイルスへの対応として園環境を見直す際に、豊かさという視点を失わずに工夫すると危機感に押しつぶされた感じにならないと感じました。

今日はベルガーさんからたくさんお話をお聞きでき、もつと語りあいたいという思いでいっぱいです。それぞれの場で考え続けられたいと思います。ありがとうございます。

(2020年7月19日 Zoomにて開催)

注
ドイツでは6歳で1年生になる子どもが多いが、5歳で入学する子ども8歳で入学する子どもという、一人ひとりの能力に合わせた学びとなっている。

一月の衛生

医学博士 齋藤文雄

— 『幼児の教育』第42巻第1号
(1942年) から —

倉橋先生の御命令で暫らく皆さんのお仲間入りをさせて戴き、職域奉公をいたす事になりました。私は医師ですからその方面から御協力申し上げて、皆さんと一緒に、強い明るい日本の子供を作ってゆき度いと存じます。

冬籠りまた寄り添はんこの柱 芭蕉

冬の陽を泌々と浴びている俳聖の姿が眼に見える様です。然しこれは老人であればこそ柱が頼りになるのです。子供はそんな事では満足しません。寧ろ思い切つて日の当る外に出て遊びます。それでいゝのです。冬こそ日は短かい時、日の光りの弱い時ですから、出来るだけ子供は日当を利用いたしましょう。どんどん外で澄み

切った綺麗な空気を吸って遊ばせて下さい。

向うから「マスク」をかけた坊やが来ます。感心にきちんと鼻と口が隠れています。然し待てよ。霜はおりているが今朝は風も無いぞ。埃りも立っていないぞ。坊やは別に風邪をひいている様な様子も無いようだ。まさか坊やのお母さんは、空気が冷たいからと云うので「マスク」を掛けてやった訳では無いだろうと思うが。人混みの中、埃の多い所、そこでこそ「マスク」は必要だがこんな澄み切った朝の空気をわざわざ「マスク」で閉め出してしまふ様な無駄をするお母さんは居ない筈だが。

お家の都合でお子さんの幼稚園を休ませてはいけませんね。ことに冬は身体の鍛錬に絶好の時です。寒かろうが雪が降ろうが何のその、幼稚園を休みたがるのはお母さんでお子さんでは無い事の方が多い様です。お天気の良い日こそ鍛える日です。身体も丈夫になります。精神も堅固になります。不屈不撓の精神と云うのはこ

う云う所に芽生える事を忘れないうで戴き度いものです。

夜お床に入る時はどんな寒い日でも真裸体に着物を脱がせて寝巻きと着替えます。たとい一日でも「シャツ」を着たなりで寝せたりしてはいけません。風邪ひきの予防に大切な事です。朝起きたら直ぐに又着替えます。この時も余り暖めたりして着せるのはよくない事です。

お正月のお休みで喰べ過ぎはいたしませんか。今年は何が不足で余り喰べすぎでお腹を毀した様なお子さんは少ないでしょう。物が不足と云う事は国全体がそうなので皆な辛棒しなければなりません。然し大人と違い育ち盛りの子供では、分量は兎に角、喰べ物の種類が偏しては困ります。丈夫に育たないからです。卵や牛肉が一週間も二週間も食べさせられない。そうしますと不足しますのは何よりも先ず「ビタミン」のAやDです。これは一番弱った事です。ですから、この冬は何処のお家でも肝油を備え

ておき度いものです。油の儘の肝油でも良し、球になった肝油でもいい、ですが、兎に角、これどんな食物の窮乏時代が来ても、鳥眼や、蒼白い顔にならない様にしてゆき度いものです。

* 本文は新漢字、現代仮名遣いにし適宜ルビを振りしました。

(編集部)

昔の『幼児の教育』が 手軽に読めます

1901年の『婦人と子ども』創刊から、大正時代に『幼児の教育』と装いを変えて、これまで110余年の全巻全号、日本の幼児教育・保育の軌跡をたどる貴重な資料を自由にダウンロードしてお読みいただけます。

〈幼児の教育〉〈お茶の水女子大学〉〈教育・研究セレクション〉で検索してください。

変わっくるんじゅ

興梠侑
 (幼稚園教諭)

幼稚園教諭として働き始め、2度目の季節

を迎えています。今年度も、昨年度と同じ4歳児クラスの担任ですが、子どもたちとの日々は、いまだに思いがけないことばかりで、試行錯誤しながら過ごしています。目の前の出来事にわくわくするときもあれば、どうすればよいか困ったり悩んだりして、何もできずに立ち尽くしてしまうときもあります。それでも、子どもたちとのことを振り返り、その中で子どもが変わってきたことに気づくと、なんとも言えない喜びを感じて心が温かくなります。そんな「変わっていくこと」につい

て、考えていることがあります。

大事にしたいと思うこと

少し話がそれますが、私にとって、子どもたちと一緒に過ごすことは、ただ子どもと時間を共にする、ということではありませんでした。子どもたちのことを励まし、誘い、時にはそっと見守ったり、叱ったり……。毎日の保育の中で、いつも頭の片隅にあるのは、和光鶴川幼稚園の教育方針のひとつでもある、「自分っていいなと思える子どもに」ということです。子どもたちが、自分のよいところ

を知ることや、自信をもてること、自分を好きになれることが、きっと、幼稚園での生活や子どもたちのこれからの生活を、もっとよいものにしてくれると思うからです。「いいな」と感じるころは、子どもたち一人ひとりによって違うので、例えば、「泥だんごをピカピカに作れる私ってすごい！」というようなことも、この言葉には当てはまるのだと思います。

私が子どもたちと過ごすときには、子どもを励ますのも見守るのも、どんなかわりであって、「自分っていいな、と思えるようになってほしい」という子どもたちへの願いを、大事にしたいと思っています。

変わっていくのは子ども自身

私が園で一緒に過ごしている子どもたちは、いつも変わっていつているのだと思います

す。そして子どもたちが、「自分っていいな」という姿に向かっているのは、私もうれいんです。朝、登園してきてから「何もしたくない」とずっと座っていた子が、登園するや否や急いでリュックを置いて、園庭に走り出していく……。何をするときも、仲良しの友達について行っていた子が、一人で「先生、鬼ごっこしよう！」と私を誘いにくる……。自分の絵をいつも最後に塗りつぶしていた子が、満足げに「できた！」とつぶやく……。自分に自信をつけたときの子どもの姿は、心に残ります。

子どもたちは変わっていくのですが、変わっている最中に、「あの子が変わってきたぞ〜」というように、その変化がはっきりとわかることはありません。私は、4月にその子と出会った頃のことや一つ前の季節を思い出したときに、「そう言えば最近……」「あれ？ 前

と違って……」と、ふと、その子が変わったことに気づきました。

一人ひとりに、「やりたいことを見つけてほしいな」「自分で好きなことを選んでほしいな」「納得できる絵を描いてほしいな」と思っ
てかわっているのは確かですが、「いつから変わったのだろう」「なぜ変わったのだろう」ということに答えはありません。子どもたちの変化は、あくまでも子どもたち自身の変化であり、私が「こうなってほしい！」と願った通りに変わっていくはずはないのだと思います。それでも、子どもたちの変化がうれしいのは、私とのあれこれは関係なく、子どもたちのそんな姿が見られた、そのことがうれしいのです。

きっかけが説明できないからこそ、子どもの変化を見つけると、今、目の前にいる子どもたちとどう過ごすのか、真剣に向きあいたいとあらためて思います。2度目の季節でも、

子どもと私とのかかわりの中で、何が子どもたちを励まし、よりどころになるのかはわからないからです。

私自身の変化も見つけて……

この2年間を振り返ると、私自身が変わってきたことも感じます。

例えば、走っている途中で転んでしまい泣いている子どもに、「痛かったね、大丈夫?」とは言えても、その子を「もう一度走ろうよ」と誘うことは、以前の私にはとてもためらわれることでした。「そろそろ痛みはなくなっただろうから、もう一回、走ってみてほしいな」と心の中でつぶやいていても、「こんなこと言っ
てよいのかな?」と、自分の思いを前面に出すことは不安だったのです。もちろん今でも、ためらいや後悔はありますが、「もう一回、一緒に走りたい」と思ったのであれば、「やってみようよ!」と声をかけている自分がいま

す。

人形劇ごっこでは、「これだとお客さんにはわからないよ」と子どもたちに伝えたこともありました。隣のクラスを招待しようということになったのですが、人形が見えない、言葉も聞こえない……というのが、お客さん役になった私の率直な感想でした。「招待したい」という子どもたちの思いをかなえることもできたのに、その前に思わず、私の感じたことを子どもたちに伝えたのは、自分でも驚きましたが、その後も「本物みたいに」と、人形劇ごっこが続いたのを見て、「言ってみてよかった」とホッとしました。

子どもたちを前に、感じたことを率直に言葉にして伝えると、私も、だんだんと居心地よく過ごせるようになりました。ありのままの自分で過ごしても、子どもたちと楽しい時間を積み重ねられると気づき、幼稚園教諭と

しての自分に、自信が出てきたのです。

私の変化も、今、自分自身を振り返ると感じる場所であって、このことがきっかけで、いつ変わった、とはっきりとは言えません。きっと子どもたちとのやりとりや、周りの先生方との話の中で、「私も、もっと思いのままに過ごしてよいのだな」と考えるようになったのだと思います。以前の自分と今の自分を比べるわけではないのですが、ひとつ言えるのは、子どもたちとの時間をより楽しんでるのは、今の自分だということです。そんなふうに関わりが変わってきたことも、少し誇らしく思っています。

保育の中で、子どもも私も変わっていく、その変化に気づくことは、私に大きな力をくれました。「私もまんざら悪くないぞー」と思いつつながら、また明日も、子どもたちと過ごしていきたいと思えます。

保育をつなぐ

～ お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ～

Vol.8

新しくつくる
～ 新型コロナウイルス
感染予防の中での日常 ～



佐藤寛子



「保育をつなぐ」では、これまで学級担任、養護教諭、事務職員、隣接するいずみナーサリー保育士と、さまざまな立場から子どもとのつながり、子どもとかわる思いを綴ってきました。

第8回は世界中の人々の暮らしを大きく変えた新型コロナウイルスの流行、私たちの家庭、園や学校、会社等で起きたたくさんの変化や挑戦がまだまだ継続しているであろう時期にお届けします。

3密を避けるという、繰り返し求められる原則は、保育の世界で何より大切にしてきた「つながり」と相容れない、大きな矛盾を生みました。一方で、人と共にいる集団での暮らしの変化に際し、気づかされたこと、見えてきたことは、悲観することばかりではないという言葉も、多くの方が口にされています。今だからこそその思いを、記録に記憶に留めておきたい、そして、この出来事と向きあう中でも、保育者と子どもとの変わらないつながりが見えてくる、4歳児担任の思いが込められた記録です。

*

佐藤寛子（さとうひろこ）
お茶の水女子大学附属幼稚園教諭。

始まり

2020年度の保育の始まりは、混乱と戸惑いでいっぱいだった。前年度の2月末より猛威を振るい始めた得体の知れないウイルスの影響で、日本中が見通しのもてない不安に苛まれ、保育現場もその渦に巻き込まれた。打ち出された「新しい生活様式」は、密集、密接を回避するものであり、かかわりあつて育ちあつていくことを大切に考えてきた保育のありようとは真逆とも思えるものだった。そして、同じように子どもが過ごす保育現場であるにもかかわらず、保育所は保育を継続することを求められ、幼稚園は休園を余儀なくされ、その対応が大きく異なることにも戸惑いを覚えた。

新しい生活

緊急事態宣言解除後の保育再開について、

不慣れなりモート会議も取り入れながら、園内で話し合いを重ねた。

時間差の始業式・入園式、学年ごとの時差登園やグループごとの分散登園の実施、公共の乗り物を利用している家庭も安心して通園できるよう送迎方法を多様化、学年ごとに登降園口を変える工夫、水筒の使用……等々。

インターネットを利用した園だよりや園の様子のビデオ配信は、休園期間中から開始したが、保育再開後も継続することにした。降園後の消毒作業については、養護教諭を中心に念入りに打ち合わせを重ね、消毒を要する箇所や遊具、適した消毒液や洗剤など、事前に園内で共通理解を図った。

親子で手をつなぎ、歩いて通うことを大事にしてきた登降園の風景が、変わってしまう。年長児が花道を飾り、新入園児を遊戯室まで案内する例年の入園式はできなくなる。用務員さん手作りの、子どもたちが大好きな「幼稚園

園のお茶」もなくなってしまう。そんなさまざまな変更には戸惑いはあった。けれど、変えることに躊躇しなかったのは、おそらく、子どもたちが一日でも早く園に來られるようにと願う気持ちで、教職員皆が一致していたからであろう。

保育再開後は、変わったこと、変えることを理解し、柔軟に対応してくださる保護者の協力と、日々楽しみに登園し、一瞬一瞬を真剣に生きる子どもたちの存在が、何よりの原動力になった。

4 歳児の「つくろ」

まだ梅雨が明けない6月半ばのことである。この日は、登園するとすぐに製作を始める子どもたちが多かった。空き箱を利用した車づくりだ。

5 歳児の間ではやり始めた車づくりが、4 歳児に広がってくるのは、あつという間だっ

た。「いいな！」と思うものをキャッチし、即自分たちの遊びに取り入れるのは、4 歳児の得意とするところだ。Aを含めた数人の子どもたちは、保育室の空き箱入れから、イメージにしっくりくる大きさの箱を見つけ出し、ストロー、竹ひご、ペットボトルのふた4個を手に握る。そして「早く、穴を開けて！」と口々に言い、ふたを私に差し出した。目打ちを使って器用に穴を開ける5 歳児と異なり、個人差はもちろんあるものの、4 歳児には目打ちの扱いも力加減もまだ難しい。子どもたちもそのことがわかっていて、穴開けは私に任せる。「早く！ 早く！」とせかす割には、私がふたに穴を開ける様子を、皆じつとよく見ている。怖いくらいの真剣なまなざしだ。よく見て、やり方を理解しようとし、できそうならばすぐにでもやってみよう、と思っている気持ち伝わってくる。

4 歳児の物づくりは、忙しいけれど面白い。

「そんなに焦らなくても、ゆっくりやったらいいのに……」と思うが、とにかく形にしようと思う。「自分でやりたい！ つくりたい！」という気持ちが強いけれど、「できない……できないかもしれない……」と思う気持ちも同じくらい強い。あつちに揺れ、こつちに揺れながら、物との距離を縮め、つくる楽しさを感じ取っていく。その過程が興味深い。

ちよつとしたことで気持ちがなえて、やる気が失せてしまうことも多い。子どもたちのペースに合わせて手早く作業するが、物とかわる面白さは、一緒にじっくり味わいたいと思う。

Aの車づくり



▲自分でやりたい（4歳児）

早々にタイヤを付け終わったAは、シンプ

ルな車体に、空き箱やストローをさらに取り付け始めた。材料棚にある折り紙やセロハンなどを、「これも使えそうだな……」とつぶやいては、セロハンテープで貼り付けていく。周りの子どもたちは、車体に色付けすると「できた！」と言って、走らせるほうに夢中になったが、Aは裝飾することが面白くなったようだ。「ここからミサイルが発射するんだ！」と車体の前部分に取り付けた2本のトイレットペーパーの芯から、赤いお花紙を引つ張り出す。Aのこだわりがどんどん形になっていくのは、見ていて気持ちがよかった。Aは、午前保育の大半の時間を車づくりに費やした。

壊す（分解）

「できた！ 見て！」と、Aは満足した様子で周りの友達や私に、出来上がった車を見せて来た。その出来栄には、皆が驚いた。Aの車は、タイヤの付いた車体から上に伸び、

前後に広がったダイナミックな仕上がりがだった。「Aくん、すごいよー」と、一緒につくっていたBが感心したように言う。Aはうれしそうに笑い、車を大事に床に置くと、そっと走らせ始めた。(気に入ったものが出来てよかった)と思い、私はその場を離れた。

ところが、しばらくして戻ってみると、思ってもかけない事態になっていた。Aが怒ったようにつくった車を踏みつぶし、引きちぎって壊し始めている。周りの子どもたちも、驚いてその様子を見ている。「何が起こったの?」と、その場にいたフリーの教諭に目配せするが、「わからない……」と首を振る。保育室の状況や周りの子どもたちの様子から、誰かといざこざがあったようには思えない。(原因はAの中にありそうだと感じた。

とりあえず、一緒に壊すことにした。ただし、あれだけじっくりつくっていた物だから、踏みつぶし、引きちぎるような壊し方は私に

はできない。箱と箱をはがし分解した。無言で一緒に壊しながら、Aの気持ちが徐々に落ち着いてくるのが伝わってきた。同時に、何が起こったのか、なんとなくわかったような気がした。時間をかけ、工夫してつくり上げ、出来上がりに満足だったからこそ、壊すのにもエネルギーがいる。そうまでして、なぜ壊さないといけなかったのか。

おそらくAは、車を走らせてみて気づいたのだろう。あるいは、廊下に出て、5歳児がコースを走らせて遊んでいるのを見たのかもしれない。周りの子どもたちは、つくった車でいかに速く走らせるかを楽しんでたようにだった。



▲コースを走らせる (4歳児)

つくり直す(再生)

昨年からAはよく物をつくった。ブロックを組み合わせてつくった銃や剣は、バランスが良く形がいいので、他の子どもたちがまねてつくり始めることが多かった。Aが積み木で乗り物や基地をつくると、周りの子どもたちは興味をもって集まってきた。あの頃、Aは自分の世界の中で、つくることを存分に楽しんでいて。今、周りの様子が見えてきて、友達とかかわる楽しさを知り始め、Aの世界が広がってきたことを感じる。

この日、Aは壊した箱とタイヤでシンプルだけれどスピードが出る新しい車をつくり直した。降園時間が近づき、片付けになってもつくり続けるAに文句を言う人は誰もいなかった。最後までしつかりつくり上げることを保障したいと思う私の気持ちが伝わったのか、Aの気持ちがわかるのか、周りの子どもたち

はいつも以上に張り切って片付けてくれた。

新し〜〜

「今」を真剣に生きる子どもたちからは、学ぶことが多い。

変えることと、変えてはならないこととを見極めつつ、今まで大切だと信じてきたことも見つめ直し、時には壊してみることも必要なのかもしれない。壊して新しくつくり直してみることで、本当に大切にしたいことは何であるのか、あらためて気づくことができるように思う。

世界中が、今もなお、見通しのもてない状況にあるが、園に子どもたちの時間がしつかりと流れていけば、物とかかわり、人とつながる豊かな幼児期の暮らしは変わらずに守られていくはずだ。「新しい生活」は与えられるものではなく、子どもたちと私たちとでつくっていくものだろう。

これからのチャイルド・スタディーズを展望して④

見つけて・驚いて・気づいたことからは始まる保育

宮里 暁美

(大学教授)

附属幼稚園、いずみナーサリーに次ぐ乳幼児施設である文京区立お茶の水女子大学こども園。平成28年4月の開園以来、大学生や日本各地の実践者、研究者が保育の実際に触れて学びを深めることができる機会を多く提案してきた。私は開園時より園長としてこども園に勤務し、園の保育者と共に実践と研究に携わり、その成果を書籍やDVDにまとめ広く発信してきた。子どもの「やりたい」が発揮される環境の在り方を追求する中で見えてきたことが、「見つけて・驚いて・気づいたことから始まる保育」である。こども園の中で大切に営まれていることを紹介する。

さまざまなモノや人と出会い見入る時間を大事にする

子どもたちは小さな生き物に興味を示す。0歳児クラスの子どもたちは、小さなアリや小さなクモを見つけると、動かなくなる。静寂の中でじっと見続ける。「おや?」「あれは何?」と思う気持ちが広がり、言葉が交わされるきっかけになるのも小さな生き物との出会いである。小さな生き物と出会い見入っている時間を大事にし、保育者もその時間を共に過ごす。セミの鳴き声を聞けば「どこ?」と樹を見上げる。スイッと通り過ぎるトンボを見れば、その行先を確

かめないではいられなくなる。レイチェル・カーソンの言葉の中に「センス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目をみはる感性）」がある。体全体で吸収している姿だと考える。キャンパスの中を散歩すれば多くの学生に出会い、自然なかかわりが広がる。

気付きを表現し伝えあう喜びに共感する

子どもたちの日々の生活は驚きに満ちている。動かないと思っただけで見ていたセミが急にお腹を震わせて鳴き始めたり、ヤモリが卵を産んだり、チョウが羽化したりなど。その場に立ち会った子どもは、そこにいなかった保育者に出会えると、興奮して教えてくれる。目を輝かせて見たことを伝え、それが驚きと共に伝わったとしたら、「伝えることができた」という自信につながっていく。気付きを自分なりの言葉や動き、表情で表現し、伝えあう喜びを感じる生活が大切だと考える。経済産業省未来の教室「お茶大こども園ラボ」として取り組んだ探究プロジェクトの中でも、風で舞い上がるスカーフを見て思わず「あー」と声を上げ、その声が重なるように広がっていく0歳児の姿が報告されている。気付きを表し伝えあい、響きあう中で豊かさが育っていく。

「その時でしか味わえないものやこと」を大事にする

夏、急に空が暗くなり大粒の雨が降ってくることもある。テラスに出している靴箱などを慌てて取り込みつつ、この雨を子どもたちと見たいと願う。時折雷も鳴るときには、安全に注意しながら「今でしか味わえないこと」を味わうようにする。しばらくして雨が止み、空に大きな虹がかかったら外に出る。雨上がりの道、急に鳴き始めたセミの声など、心に残る情景になる。「夕方」

も大切にしたいことのひとつである。少し薄暗くなりかけた頃の自然は格別である。夏、日中は暑さが厳しく外に出られないので夕方の散歩を大事にする。その時その場でしか味わえないことがある。こども園は朝から夕方まで開所している。子どもたちが長時間いるからこそできる保育の可能性と望ましい保育の在り方について、さらに研究を深めていきたい。

子どもたちの周りに、いろいろな大人がいる

こども園には何でも作ることができる用務員の杉浦さん註5がいる。環境整備を担当しているが、木工が得意で子どもたちから「何でも作る人」として尊敬を集めている。杉浦さんは木工の他にも、コンポストを作って野菜作りに活かしたりしている。野菜が育つ周りには小さな生き物が集まってくる。コンポストの中をのぞくと、落ち葉が土になっていく様子を見ることができたり、土の中にミミズや幼虫を見つけて大騒ぎすることになったりする。他にも生き物博士のMさん、縫い物が上手なOさんなど、子どもたちの周りにいろいろな大人がいることが、子どもたちや保育者の体験を豊かなものにしていく。

保護者を巻き込み、体験を共有する

子どもたちが感じていること、夢中になっていることを保護者と共有することを目的として「ワクワクデー」という取り組みをしている。年6回、土曜日に開催する。親子で参加する自由参加の企画である。大学内にあるという利点を生かし、キャンパスの中でダンゴムシを見つけたら、秋の虫探しをしたり。日本昆虫協会の方をゲストとして招き、家庭で虫を育てるコツなどを教え

でもらったりもした。保護者の中に眠っていた子ども心に火がつき、目を輝かせて虫捕りを始めるお父さんが出てきたりした。保護者を巻き込むことで、楽しさが広がることを実感している。他にも、日々の保育をドキュメンテーションやポートフォリオにして保護者に向けて発信することも大切に積み重ね、その可能性と方法について研究している。^{注6}

「見つけて・驚いて・気づいたことから始まる保育」の中で大切にしていることをまとめた。園生活の中でさまざまなモノや人、コトと出会う中で営まれていく保育である。そこでは日々さまざまな物語が紡がれている。ここから始まる学びを広げていきたい。

注

- 1 宮里暁美監修『0～5歳児子どもの「やりたい!」が発揮される保育環境』学研プラス 2018年
宮里暁美編著『思いをつなぐ保育の環境構成 0・1歳児クラス編 2・3歳児クラス編』4・5歳児クラス編』中央法規出版 2020年
- 2 文京区立お茶の水女子大学こども園協力 DVD『ある認定こども園の挑戦Ⅲ 創る・織りなす保育』都市部での保育のこころみ』岩波映像株式会社 2018年
- 3 レイチェル・L・カーソン著 上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社 1996年
- 4 「お茶大こども園ラボ」幼児期の教育・保育探求プロジェクト開発「経済産業省「未来の教室」2019年
- 5 日本保育学会第73回大会ポスター発表「『創る』が身近にある保育環境の意味を探る」2020年
- 6 日本保育学会第72回大会ポスター発表「ポートフォリオを使って子どもの育ちを共有する」2019年

子どもには密が必要

仙田満
(環境建築家)

コロナ禍と呼ばれる状況が、このように大きく世界的に、社会経済的に影響を与えることを、今年初めに誰が想像できただろうか。コロナウイルスはほんの数か月の内に世界中に広がった。わが国はロックダウンには至らなかったが、4月7日に緊急事態宣言が発令され、自粛生活を余儀なくされ、保育園・幼稚園・こども園は休園、学校は休校措置がとられた。5月25日に全国的に宣言は解除され日常的な生活に戻りつつあるが、その後も東京では連日100人以上の新規感染者が報告されている。コロナウイルスの第2波、第3波も予想され、今後2、3年はウィズコロナの生活を覚悟しなくてはならない。

その中で、生命を守るための新たな生活様式が提案されている。手洗い、うがい、マスクを着ける、3密を避け、社会的距離約2メートルを守って行動することが求められている。しかし、これらの提案は生命と経済という医療や社会的な問題を主眼としており、子どもの教育、教育という観点からの議論がなされていないことは、極めて問題であると考えている。子どもの1日、1週間、1か月は大人のそれとは異なる。もっと凝縮したものだ。それを2メートル離す生活は子どものあそび、すなわち学びの機会を奪うものだ。

私は「子どもを守るためにどのような行動す

べきか」という点から、代表を務めることも環境学会のホームページにおいて、「画一的な新たな生活様式を求めるのではなく、年齢層別のガイドラインをつくるべきだ」というメッセージを発信した*。

こどもの成長において密接は重要である。こどもは触れ合うことによって成長していく。体を接触させることによりさまざまな感覚を発達させていく。多くのスポーツも体を触れ、ぶつけ合う。こどもにとってあそびは「まなび」なのだ。人間のさまざまな力はこども時代に育まれる。その機会を奪わないで欲しい。

コロナウイルス感染症は高齢者が重症化しやすいと言われている。従って高齢者が感染のリスクを避けるために、非接触型の生活を余儀なくされてもやむを得ない。大人が非接触型の生活をするのも致し方ない。

しかし、こどもの重症化率は低いと言われて

いる。確かにこどもが亡くなった例もテレビで紹介された。しかし、こどもの感染率も死亡率も圧倒的に低い。こどもは保育園、幼稚園、学校で一緒にあそび、まなび、接触を通して成長して行く必要がある。

そのため、新たな生活様式という画一的なものではなく、小さなこども、学童、青年というようにそれぞれの年齢層に合わせた生活様式のガイドラインを示すべきと思われる。

保育園でこどもが2メートルの間隔をあけて行動している映像が報道されているが、とても違和感を覚える。人間は動物である。かつて動物学者H・ヘイガーによって動物と距離について、個体距離と社会距離という2つの概念が示された。個体距離とは個体としての生物が自己と他者を分けるバランスの良い距離である。社会距離とは群として動物が社会を形成する距離をいう。「社会的距離（ソーシャルディスタンス）」が今回重要だと指摘されている。これは患

者の飛沫に影響を受けない距離という意味で使われているので、社会的距離と名付けられているが、これはH・ヘディガーやその距離を人間に応用したエドワード・ホルルの個体距離の概念に近いと思われる。

問題はこどもにとって個体距離ゼロ（密接距離）の中でこそ安心・安全を感じることができるということである。ジョン・ポウルビーのタッチメント（愛着）理論に示されるように、こども達は触れる、触れられる、いだかれる事によって安心を得て、外界へ挑戦できる。そして成長して行く。

そのような親密な関係をコロナウィルスの影響で悪いものだという意識を植え付けられてしまうことがとても心配だ。今回の問題はコロナ対策のための一時的なライフスタイルといえるかもしれない。しかし2年も3年も続くとも言われており、それがこども達にとって習慣化してしまう事が心配だ。

このメッセージに対して、多くの小児医科学、保育学関係者より賛同のコメントが寄せられた。こども環境学会会員のうち、医療関係者はあまり多くないにもかかわらず、多くの小児科医より賛同いただいたことに正直驚き、責任の重さを感じた。

私は建築家である。子どもの成育環境を空間づくりという観点から研究し、デザインしている。最近、ある幼稚園で小上がりに直径1メートル程度の穴を開けたところ、子どもにも大変人気となった。子どもは穴の中に一人で入って本を読んだり、大勢で入っておしくらまんじゅうをしたりして遊ぶ。

子どもは体を寄せあつて、安心する、一体感をもつ、共感する。体を寄せあう行為が子どもの育ちにとってとても重要なことだと実感してい



▲越谷くるみ幼稚園（埼玉県）
絵本コーナー 一人で穴の中に座って読む。



▲ちぐさこども園（群馬県）
絵本コーナー みんなで集まって読む。

る。この写真を見ると誰もがうなずく。子どもの成育環境の役割のひとつは、共感を体験することではないかと考えている。共感することとは、生存のために極めて重要な感覚であり、それをあそびながら体験することは大切だ。体を寄せ合わせながらあそび、学ぶ体験は忘れられない。

密接な空間こそが子どもに安心感や居心地の良さを与える。マスクを着け、2メートル離され、食事をし、話してはいけないという生活が強いられるため、「園に行きたくない」という子どもが増えていると聞く。

私たちはコロナ禍においても小さな子どもにとっては個体距離ゼロの世界こそ重要であることを認識し、子どもの代理人として発信していくべきではないだろうか、と考えている。

例えば社会的距離のガイドラインを、6歳まではゼロ、7歳から12歳までは1メートル、13歳から18歳までは1.5メートル、18歳を超えたら2メートルと年齢ごとに設けることにより、保護者、保育者、教育者は気持ちよくなり、子どもが自由にのびのびあそべるようになるのではないだろうか。子どもの時間はかけがえないものだ。大人が奪ってよいものではない。確かに園もクラスターになる可能性はある。しかし今のところ幼稚園、保育園、こども園がクラスターになった事例は伝えられていない。私はあらゆる政策は子ども第一、子どもを最優先にすべきと考え、「こども第一運動」を唱えている。子どものために私たちはもっと大きな声で年齢別ガイドラインの設置を主張しよう。

*メッセージ掲載サイト（こども環境学会ホームページ）
http://www.children-envy.org/magazine/blogs/blog_entries/view/10/1456b3e68919e2fd41fb62dbe040045

生活文化と「お花屋さん」

松山 誠
(園藝探偵)

お正月に飾られる「マツ（門松、若松などの切り枝）」の収穫作業は、毎年10月の第3週頃から始まります。ずいぶん早いと驚かれるかもしれませんが、例年「12月第2日曜日」に開かれる松市に合わせて産地では、暑さが落ち着く頃を待って収穫に取り掛かり、水に浸けて保存していきます（写真①、近年は冷蔵施設も利用）。松市は、1軒の出荷量が何万本にもなるマツがこの日一日で取り引きされる、まさに真剣勝負の日。昔と違って景気づけにお酒が振る舞われるようなこともありませんが、やはりこの日の花市場は通常と違った緊張感や高揚感に包まれ、いよいよ年の瀬だと感じられるようになります。

写真②は、茨城県神栖市にあるマツ（クロマツ）を栽培する畑の様子です。サッカーで有名な鹿嶋市とともに関東最大かつ日本屈指のマツの生産地です。太平洋に面し清冽な風渡る畑には、見渡す限りマツだけが「密植」みつしよくされていて一種独特の雰囲気があります。マツは種まきから3年目、4年目に地際から刈り取って収穫・選別し出荷されます。お墓参りの束に入れる細くて短いものから高さ2メートルの大きな装飾用まで、すべてこの一つの畑から収穫されるのです。植物は苗を密に植えることによって互いに競争して生長し、また支えあって長く真つすぐに伸びます。株の下の方の枝や葉は大きくな

松山 誠（まつやま まこと）
 花のクロノジスト、園芸関連の執筆・編集。学生時代、お茶の水女子大学児童文化研究会に所属し自分の大学以上にお茶大に通う日々を過ごした。
 『園藝探偵』1～3（誠文堂新光社）など。

れず、自然に枯れ、門松や若松に適した姿になります。写真③は、収穫途中の畑の姿ですが、枝が真つすぐに伸びている様子がわかります。マツには菌根菌といって根の周辺に共生する菌類が豊富なことで知られていて、地表には白い菌糸が無数に見えます。マツは広範囲に広がる菌根菌の働きによって痩せた土地でもよく育ちます。

少し難しい話になってしまいましたが、マツは本来このように真つすぐに育つ植物ではなく、人間がこのような栽培方法を取ることで利用しやすい姿に変わったということなのです。日本でも古くから栽培されてきた「麻」や「からむし（苧麻）」も、同じように「密植」して育てます。脇枝が出るのを抑え、真つすぐに生長させることで、品質の良い長い繊維が採れるように



▲写真① 仕分け・調整され松市まで保管されるマツ。



▲写真② 見渡す限り密植されたマツの圃場。



▲写真③ 収穫時、地際から刈り取られる。

なるのです。誰が見つけた技術なのかはわかりません。ただ、とても古い時代から綿々と行われてきた技術なのだろうと想像できます。

実は、温室などでの切り花生産の現場でも、植物を密に植えることで生長を促し、茎を真っすぐに伸ばす性質を利用しています。近年の研究によると、植物は体内にあるさまざまなセンサーで環境を測っていることがわかってきました。たとえば、植物は日没（end of day）から数時間における温度や光刺激に強く反応するのですが（EOD反応）、この時間帯での温度管理や光の照射を工夫することでより効率的な生育調節を行うといった取組みが実際に行われています。根付いた場所から動かない植物は数多くの感覚器官を備え、自分の姿を変えて生きるすごい力を秘めているのです。太陽がゆっくりと西に沈もうとする頃、植物たちは、あたりを見回して、背伸びをしたり早く花を咲かせようと思ったりしていると思像するとちょっと楽しい気持ちになつてきませんか。

「花屋」を学び、「園芸」を利用する

お花屋さんというところ、切り花や鉢植えを並べ、花束を売るようなイメージですが、仏壇の花や神棚に供える榊なども用意し、お盆やお彼岸、「母の日」といったいわゆる「もの日」を含め、生活文化を成り立たせるために欠かせない商品を日々取り扱う、いわば社会的機能を持った街場の施設なのだと思います。たとえば年末には、鏡餅に敷く裏白、ゆずり葉などのほか輪飾りや「しめ飾り」も扱います。しめ飾りにはさまざまな型があり、全国各地に伝統的で美しい飾りが見られます。かつて東京を中心とした地域では、現在の足立・葛飾・江戸川区、あるいは荒川・墨田・江東区といった近郊の農村で農閑期の副業として作られてきたもので、大切な生業の一つでした。花屋ではクリスマスリースを手作りする教室が流行っていますが、ここ数年は、しめ飾りづくりも人気になってきています。現在は材料となる「稲わら」の入手が難

しくなっていて、イネの栽培から始めている人たちもいます。このような四季折々の季節の行事は、暮らしにリズムを刻む楽しいイベントであると同時に、いろいろなことを考えるきっかけになると思います。子どもたちにもできることがたくさんありますから、ぜひ地元の花屋や農家を味方にしてお飾りづくりをやってみてはいかがでしょうか。

僕はいま、「読む園芸Ⅱ園藝探偵」ということで幕末から昭和にかけての日本の園芸文化の歴史を勉強しています。「育てる園芸」、「飾る園芸」だけでなく、さまざまな園芸書や文献を集めてそのテキストを「読む園芸」は誰でもいつでも始められますし、とても奥深くおもしろい活動です。園芸というと現在はかなり狭い意味になっていきますが、もともとは果樹、野菜、工芸や薬用また観賞用の植物、造園や景観の改修、軍需（防空・食糧生産）など幅広い分野を含んでおり、現代人の生活に関わるさまざまな問題解決のヒントが隠れているように思えてなりません。

せん。誰もが知っている花や緑も、名も知らぬ人たちがここまで運び育ててきた物語を持っていきます。花でも人でもいいし技術や資材など、さまざまな切り口から園芸を見ていくことで、自分とのつながりを見出し、植物の不思議さや人の営みのおもしろさが倍增するような気がします。

教育分野ではベスタロッチやフレールベルにゆかりの深い花壇づくり、学校園や教材園、中学校「作業科」など明治・大正・昭和と継続して研究・実践が続けられてきた道のりを振り返ってみることも無駄ではないと思います。一つ、課題は「花屋の利用の仕方」です。2004年、日本での「花育」の起点もここにありました。花屋の世界も生産から流通、販売に至るまで高齡化や人手不足など、いろいろな問題を抱えています。長い歴史を通じて花や緑が不要になつたことは一度もありませんでしたし、これからもないと信じ、学びを続けていこうと思っています。

シンガポールでの季節感と伝統行事

富田裕香

(シンガポール在住・元大学職員)

お茶の水女子大学附属いずみナーサリーは、温かなまなざしを向けてくださる先生方と小さな子どもたちが作り上げていく大きな安心感とぬくもりのある空間で、このすてきな建物のドアを開けるのは、ナーサリーでの一日が始まる朝の楽しみでした。ここで娘と息子はそれぞれ生後6か月から娘は2016年3月まで、息子は2017年3月までお世話になりました。

その後、先に海外赴任生活を始めていた夫と共にシンガポールで暮らし始めたのは2017年の秋のことです。

日本からの長旅の飛行機から降りて、真っ先に感じたのは、もわっとした湿気と暑さです。

日本ではそろそろ本格的な冬を前に厚手のコートが必要になるうかという頃でしたので、シンガポールにやって来たことをまず肌で感じることなりしました。

常夏の国シンガポールでは、一年を通して気温は30度前後です。乾季と雨季はあるもの、その大きく変わらず、朝は涼しくとも数時間もすればカンカン照りで、時折激しい雨が降ることもあれど、すぐに止む。天気予報を見る習慣などなくても、天気といえ、そのようなものに決まっています。細やかに服装を調整する必要もなく、毎日半袖の服を着る生活です。日の出と日の入りでさえ年間を通してほぼ同じで、午

富田裕香 (とみた ひろか)

2017年3月までお茶の水女子大学グローバル教育センター(現国際教育センター)にて勤務。

現在はシンガポールにて、3児の母として子育て中。

前6時半から7時頃にだんだん明るくなり、午後7時から7時半の間にすっかり暗くなります。日本とシンガポールの時差は1時間ですが、こんなことから赤道直下に住んでいることを感じます。

このような生活は、時計いらずで便利ではありませんが、一方で、まだ子どもたちがナーサリーに通っていた頃のような、日の入り時刻に季節を感じて一年が過ぎていった日々が懐かしく思い出されます。ナーサリーの前の一本道で、日が明るいうちにはアリやダンゴムシを探すのに付き合いながら、すっかり日が暮れた後には黄色く輝く月を見上げながら家路に就いたものでした。

シンガポールで生活を始め、すぐに一年の最後の月になりました。その頃感じていた、はつきりとはよくわからない物足りなさの原因、それは「寒さ」でした。12月だというのに、ちっとも寒くありません。こんな代わり映えしない生活があと何年も続くのはとても長く感じた

ものです。冬なのに、暑くてまるで夏バテのように感じるのは、なんともあべこべです。日本で暮らしてきた中で深く染み込んでいる「季節感」というものを、こんなにも感じたことはありません。

日本では、年の瀬といえば、冷たい空気がほおにピリツと感じる、そういうものではないでしょうか。まさに、『枕草子』の「冬はつとめて」です。「いと寒きに、火などを急ぎおこして、炭持て渡るもいとつきづきし」と聞けばその情景が浮かび、『徒然草』の「春はやがて夏の気を催し、夏より既に秋は通ひ、秋はすなわち寒くなり、十月は小春の天気」と聞けば、日本の四季の移り変わりとはまったくその通りと感ずるものではないでしょうか。

そして、新しい年を迎えるにあたって日本人に必要な要素、それは「厳かさ」ではないか、と年越しを祝う盛大な花火の音を聞きながら思いました。このようなシンガポールで感じる日本との違いを、子どもたちはどのように受けと

めているのでしょうか。

シンガポールには日本人も多いですし、日系スーパーをはじめ、日本のお店も多いので、案外、生活上の不便さを感じることは少ないです。ただ、子どもたちが日本の季節感というものを十分に実感できないまま大きくなることは、少なからず気がかりではあります。日本にいれば当たり前のようにする季節の花、旬の野菜や果物、魚、虫、鳥の名前も、できるだけ知っていてほしいと思っています。

一方で、日本の生活様式や日本で暮らして感じることを必ずしも世界共通のものではなく、異なる常識が共存しているという認識をもつことも、子どもたちにとって意味のあるものであってほしいと思います。

例えば、日本の新年度は4月ですが、シンガポールでは1月から始まります。また、中華系、マレー系、インド系から成る多民族国家であるため、食文化も多彩で、街中の至る所でこれらの料理を口にすることができます。英語を使う

場面が多いですが、北京語、マレー語、タミル語も公用語で、駅や電車内などではこれらの4言語での表記や放送があります。

子どもたちの幼稚園では、先生も子どもたちも英語を話しますが、英語母語話者に合わせるということではなく、クラスの共通語としてという認識です。さまざまな国籍、母語が異なる子どもたちが同じクラスにいますが、お互いの母語がわからなくても、お互いが英語を話せば会話をすることができます。このような環境で、日本語を母語とする、非英語母語話者である子どもたちが、英語を学ぶ意味を感じ取ってくれるとうれしく思います。

そもそも、シンガポールでは人口の7割以上を占める中華系住民にとっては、カレンダー上の1月1日より旧正月（春節）のほうが新年の始まりを意味します。チャイニーズニューイヤーは最も盛大な祝日のひとつに挙げられ、チャイナタウンを中心にこの時期はとても華やかな雰囲気になります。多宗教の国らしく、シン

ガポールには、仏教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教の宗教行事に関連した祝日が多く、季節の移り変わりを感ずることは難しくとも、これらを通して月日の流れを感じることができません。

文化的アイデンティティーをもち、文化を受け継ぎ伝え、尊重する思いは、日本もシンガポールも通じるものがあるように思います。

新年の祝い方ひとつをとってもさまざままで、子どもたちも春節や、光の祭典とも呼ばれるヒンドゥー教のお正月にあたるデーパバリのときは、チャイナタウンやリトルインディアで購入した民族衣装を着て幼稚園へ行き、伝統的なお菓子を食べたり歌を歌ったりしました。シンガポールに住むことがなければ、このような機会も得られなかっただろうと思います。

同様に、浴衣や甚平を着て、日本の外で、日本のお正月や桃の節句、端午の節句、七夕やお月見といった日本の伝統行事を体感することも、日本人としては貴重な経験だと思います。例え

ば、シンガポールでは中秋節も大きなイベントですが、日本のお月見と似ているかといえは、お団子ではなく月餅を食べますし、街中では色とりどりのランタンが飾られ、やはり趣が異なるからです。

子どもたちの幼稚園でも、思い思いのカラフルな手作りランタンを制作しましたが、毎年のことですので、前年の作品のことも思い出されます。お月見の制作活動というと、娘がナーサリーに通っていた頃、お月様の上にお団子を貼り、お月様に一つ食べさせてあげたことを表現したというエピソードもかわいらしく、今も印象に残っています。他にも、今年はどうなこのほりを作ったのかな、どんなお願い事を短冊に書いたのかな、とわが子の作品やそれにまつわるエピソードに思いをはせることは、親の楽しみでもあります。制作活動を通して育まれた感性、心の癒しの記憶もまた、受け継がれていくのではと感じます。



これ全部ボールペンなんですけどね。
40年たつとインクが固まって全部書け
なくなっている！
書けなければ文具としての価値はゼロ、
面白さもゼロですよ。

香り付き消しゴムもありました。イチゴやレモンなどフルーツなんか当たり前、
コーヒーにカレー、ピザ、栗ようかん、プリン、クリームソーダとかあるんです。
かぐと確かにその香り！ 即購入！ なのに40年たつとイチゴもカレーも栗よ
うかんも全部同じゴムの匂い……あーあ、消える感じもしないただのゴムの塊。
面白さはゼロ！

他にも変色していたり、触るだけでポロポロ欠けたり、謎の液体が出て溶けて
いたり！ きゃー！ もうホラーの世界！ 文具のゾンビ化です。プラスチック
や塩化ビニールという新素材って、実は木や金属よりもろいものだと実感。
将来ひょっとしたら価値が高まるかもと期待をして集めていたコレクションは
ほぼ全滅、大きな見込み違いでした。40年たつても使えるシャープペンシルや
鉛筆削りは少々高くして、あとは1個100円で投げ売り！ それでも懐かしい
昭和時代のパッケージデザインだったりするので意外に売れているのはちょっ
とうれいんですけど。

文房具と一緒に出てきた旅先で買った
昔のおもちゃも、どうしてしまってい
るだけで動かなくなるのでしょうか。
遊んでもらえないおもちゃは死ぬ！
きっとおもちゃにも魂があるのですね。
そんなおもちゃたちを店の奥の大きな
テーブルに山積みにして「おもちゃの病院」。
暇な店番の折に一つずつ直して生き返らせ
ています。なぜ動かないかをひげダルマオー
ナーと討論して直っこ、これが結構楽しい！



しまっただけなのにパーツが足りなくなっているのはなぜなのでしょう
か。ひょっとしたら、夜中におもちゃの精たちが現れて夢中で遊んで持って行
っちゃったのかな？ 経年劣化も妖精さんの仕業なのかな？ そう思って納得
するしかないおもちゃの世界はやっぱり不思議がいっぱいです。

鎌倉おもちゃ屋物語

くろすかずきよ

その8

面白駄玩具の紹介と
新米おもちゃ屋の
どたばたエッセイ!

いよいよお店を全スペース受け継ぐことになり、果たして買い集めた駄玩具とペーパークラフト作品だけで棚が全部埋まるのだろうかという心配。

まずは、ひげダルマオーナーの売っていた外国製高級幼児おもちゃも棚を一つ残すことにしました。今までのお店の常連さんのためと、急に仕事なくなったオーナーがすることなくて寂しがってボケたりしないようにいつでも来て自分のおもちゃを売ってくださいよという敬老の気持ち……実は年齢は五つしか変わらないんですけどね。で、売り上げの何割か頂くとするのもおこがましいし、

基地のある街みたいなかんじてすかね



たどえがイヤだね

何より面倒くさいので、ここで売れたものはすべてオーナーの稼ぎという治外法権のエリアです。一人で店番するよりは時々来てもらっておもちゃ談義をするほうが断然楽しいです。さて、他に棚を埋めるものはないかと探していたら出てきたのが昔の文房具コレクションです。

「擬態」って知ってますか？ まるで葉っぱのような蝶とか枝のようなバッタとか蛇に見える幼虫とか、生き物が身を守るために違うものに見えるようなデザインの体になっている……これ、昔文房具ではやったんですよ。

名付けて「擬態文具」、私それを集めていたのです。例えばこんなものたち。



「これなーんだ？」というクイズ番組ができそうで面白いでしょ。なんのために集めていたのでしょうか、まさか将来おもちゃ屋やるなんて思ってもいませんしね。そんな文具が2段の衣装用カラーボックス二つ分出てきまして、最初は、これはお宝か！ よくぞ集めていたものだと喜んだんですけど、すぐに若気の至りだったという後悔の言葉になってしまったのは……。

時がたつって悲しいものです。文具売り場で見つけて嬉々として買ったあの時からもう40年たっていますから……。

黒須和清 1955年東京生まれ。横浜在住。
洗足こども短期大学教授として手作りおもちゃや人形劇を教えるかたわら、ペーパークラフトや執筆活動、研究会講師の仕事などで忙しい。

- 未来—保育の新たな地平へ—], フレーベル館, 84-85.
- 金井徹・前田有秀・杉山弘子・安田勉・小松秀茂 (2016) 「子ども・子育て支援新制度下の幼保連携型認定こども園における課題の検討」, 『尚絅学院大学紀要』, 71, 27-40.
- 木村創 (2017) 「3.認定向山こども園における『保育の質』向上の取り組み」, 高橋健介・請川滋大・相馬靖明編著『新時代の保育2 認定こども園における保育形態と保育の質』, ななみ書房, 27-41.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』, フレーベル館.
- 高橋健介 (2017) 「はじめに」, 高橋健介・請川滋大・相馬靖明編『新時代の保育2 認定こども園における保育形態と保育の質』, ななみ書房, 2-4.
- 矢藤誠慈郎・森俊之・野田美樹・鈴木智子・青井夕貴・森美利花・石川昭義・大倉健太郎・西村重稀・館直宏 (2017) 「認定こども園化に伴う保育者の専門性のあり方の変化に関する研究」, 『保育科学研究』, 8, 24-44.

な事象を見出すことができるということ。2点目は、夕方の保育に特徴的な事象を生み出す環境について、その背景や文脈には、園の保育の形態によって必然的に起こることの存在や、子どもの生活リズム等への配慮としての保育者の意図があるということである。この夕方の保育に特徴的な事象を生み出す環境は、教育課程に係る教育時間の流れのままに、ただその延長に夕方の保育を位置づけていては見出すことは困難であり、さらにまた、教育課程に係る教育時間と夕方の保育を完全に分ち位置づけては、子どもたちへの配慮の必要性に対して不十分であると考えられる。その点、A園では、夕方の保育の環境は、保育室の場所が変わらずとも、A園の保育形態の中で、人数が減ることで場や物のゆとりが生まれ、夕方の保育ならではの遊びが選択され、教育課程に係る教育時間とは異なる環境が生み出されていた。

これまでの研究で夕方の保育については、在園時間の違いや長時間保育という点に対する懸念や課題として挙げられ語られることが多かった。しかし本研究では、教育課程に係る教育時間との違いや、夕方の保育中の変化に着目する中で、夕方の保育というその時間ならではの環境、それに伴う子どもたちの多様な姿が見出されていることが明らかになった。夕方の保育の環境について捉え直し、認定こども園における一日の保育の中に「夕方の保育」として積極的に位置づけていくことによって、夕方の保育は、その時間帯ならではの保育として価値づけられることが示唆された。

ただし本研究で示した夕方の保育の実態については、ある1園の当該年度における状況の中での実態である。フィールドワークでは、その時々の子どもの様子や園の状況に応じて、保育者が試行錯誤し保育環境を更新しているということも見えてきた。多様な夕方の保育の実態があることについてはさらなる検討が必要であり、今後の課題としたい。

謝辞

本研究にご協力頂きましたA園の皆様にご心より感謝申し上げます。

付記

本稿は筆者の修士論文の一部をもとに執筆された。

文献

池本美香 (2016) 「アドバイザー・ボードから; 認定こども園あかみ幼稚園認定こども園メイプルキッズ」, 特定非営利活動法人全国認定こども園協会編 『NEW認定こども園の

夕の劇「ウルトラマンステージ」が始まる。おうちの内側で戦い、戦いのシルエットを観客に見せた後、2人は颯爽と登場する。ブルーシートとそこに映る影は劇の演出の一部となっていた。

この事例では、「おうち」としてバルコニーに作られた空間が、時間の流れの中で西日に照らされたことで、影遊びの場に変化していった。夕方の保育に特徴的な事象が見出された環境として、保育者が夕方の保育に適していると考えて出している玩具や、時間の流れの中で日が落ち、暗くなり、気温が下がっていくという自然環境の変化の中で生まれる遊びが見られた。

5. 総合考察

A園での参与観察によって収集した事例の分析から、環境に関する夕方の保育に特徴的な事象の5つのカテゴリーが生成された。以下では、各カテゴリーの分析を踏まえて、夕方の保育に特徴的な事象が見出された環境の背景とその文脈についての考察を述べる。

各事例の分析から、夕方の保育に特徴的な事象が見出された環境について、その背景の文脈は絡み合っていることを読み取ることができる。その背景は次の4点である。1つは、「①スペースの縮小」における区切りの設置や「⑤夕方の保育の遊び」の玩具で見られたような「保育者の意図によって生み出された環境」。2つ目は、「②緩やかな境」で示された「保育内容や活動の違いから生み出された環境」。3つ目は「③場のゆとり」や「④物のゆとり」のように子どもの降園に伴い「人数が減少することによって必然的に生み出された環境」。4つ目は「⑤夕方の時間の遊び」の西日のように「自然環境の変化によって生み出された環境」である。これらの夕方の保育に特徴的な事象が生まれる環境やその文脈は、そのうちの一つが理由で生まれたものではない。例えば、保育者が、カードゲーム等座って穏やかに遊べる玩具を選択しているその意図は、人数の減少や一日の活動量などを踏まえて子どもの体力や気持ちへの配慮から意図されたものである。したがって、保育の環境は様々な文脈が絡み合っていると考えられるが、その中で夕方の保育では、教育課程に係る教育時間と異なる点や変化が見出され、その時間ならではの環境を生み出し、子どもたちの多様な姿につながっていたと読み取ることができた。

本研究の結果、次の2点が明らかになった。1点目は、認定こども園における夕方の保育には、教育課程に係る教育時間とは異なる環境が存在し、夕方の保育に特徴的

ものである。【事例3】は、西日で照らされたことで思いがけず影遊びが始まった事例である。

【事例3】 西日で影遊び

201X年3月

15:30過ぎ、おやつを食べ終えたマオ（4歳児）が、観察者のもとへ来て「おうち、隠れるところ作りたいんだけど」と声をかける。観察者がマオに、保育者へ伝えるよう促すと、マオは、レミ（4歳児）とともに担任のE先生のもとへ向かった。E先生は、マオとレミの話を聞いて、ブルーシートを出し、バルコニーへ運び出す。そしてE先生は、図4-3のようにバルコニーの端にブルーシートで仕切りを作り、「おうち」を作った。マオとレミは、さらにブルーシートと壁の間を養生テープで細かく留めていき、おうちを作りながら、ごっこ遊びを始めた。

16:00を過ぎると、西日がバルコニーの真横から差し込んでくる。するとサヤカ（4歳児）が、おうちの外側から「こっちから、マオちゃん見えるよ」と、おうちの中に向かって声をかける。マオは、「サヤカちゃん本当に見えるの?」と返し、自分自身も、室内をとおうちの外側に回り込み、「レミちゃん、見える?」とおうちの中のレミに尋ねた。おうちの内側からは影が見えないため、レミは「見えない」と答えた。マオは、「やっぱり入ろう。私の作ったおうちだから」とおうちの中に戻っていった。

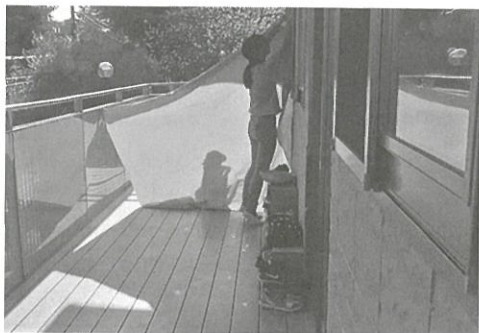


図4-3 ブルーシートでおうちづくり

その後、マオたちのごっこ遊びに3歳児のナツが加わる。するとマオは、おうちの外側にいるナツに「これ見える? 見えるでしょ、影だよ!」と声をかけ、おうちの内側で跳ねたり、素早く動いてみたりして見せる。「うん見えるよ」とナツが返すと、マオは指を3本立て「これ何本?」とクイズを出し、影遊びをしていた。

さらにその後、マオたちのごっこ遊びが終わったブルーシートのおうちでは、3歳児担任のJ先生とナツ、3歳児数名が影遊びをしていた。そして、3歳児のミノルとカン

すると考えられる。

③場のゆとり

A園では、一日を通して保育室自体は変わらない。しかし夕方の保育では、図4-1に示したように、教育課程に係る教育時間に比べて在園人数が減少するため、保育室内の人口密度が低くなり、保育室が広くなったように感じられる。場にゆとりが生まれた保育室では、その場を活用し、広さが必要な遊びをする子どもたちの姿が見られた。例えば、おやつ後に消灯され、閉じられていた多目的スペース（図3-1）を活用し、保育室内で野球や縄跳びをしていた事例や、保育室中央の4歳児の保育スペースが、5歳女児2人のダンスステージになった事例があった。限られた保育スペースの中でも、その場にいる人数が減ることで、場のゆとりが生まれ、ダイナミックな遊びが生まれていた。

④物のゆとり

場のゆとりと同様に、在園人数が減少することで、保育室にある物にもゆとりができる。例として、数に限りのある大型積み木についての日中と夕方の保育中の事例を挙げる。日中の事例では、全ての大型積み木を使おうとした女児に対して、男児が「使いすぎだよ」と声をかけ、2人は譲り合って積み木を使用する姿があった。対して、夕方の事例では、一部の大型積み木を使っていた女児が降園したことで、男児が積み木全てを使用して、彼が作りたかった「おおきいおうち」を実現させた姿があった。

日中でも、子どもたちは、他に使いたい人がいなければ、大型積み木など数に限りがある物も使いたいだけ使うことができるが、他にも使いたい人がいた場合、譲り合ったり、一緒に使ったりすることになる。一方で、夕方の保育では、日中に比べてより物にゆとりがあるため、子どもたちはそれぞれが「使いたいものを使いたい分」使って、作りたいものを実現しているという事例が見られた。

⑤夕方の時間の遊び

A園では、夕方の時間に特徴的な遊びがあった。夕方の保育の玩具としては、カードゲームやボードゲーム、塗り絵などが保育者によって出されていた。子どもたちも夕方の保育になると、「先生塗り絵やりたい!」「カルタ出して!」と保育者に伝えており、夕方の遊びとして認識していると考えられた。また、バルコニーから星や月を見たり、西日で出来た影で遊んだりしている子どもたちの姿も夕方の時間に特徴的な

【事例2】緩やかな境を超えて、4歳児の海賊船が3歳児のおうちになる

201X+1年10月

1週間以上にわたって、4歳児の保育スペースには、大型積み木や段ボールで作られた「海賊船」があった。「海賊船」は、集まりの前の片付けや子どもたちの降園時に片づけられることなく、イカリやハンドルなどが付け足されながら、4歳児の遊び場に拡がっていた。この時期、集まりでも4歳児は海賊の歌に合わせて踊っていた。

この日の夕方の保育中も、カズキたち4歳児7人は海賊船に乗り込み、「出発だー！イカリ取って！」「僕、海賊の眼帯作りたい！」と興奮した様子で海賊ごっこをしていた。多少メンバーが変わりつつも、おやつ後から約1時間、海賊船での遊びは続いた。

17:00頃になると、海賊ごっこをしていた4歳児は降園したり、カードゲームをしたりと、海賊船から離れていた。そこに、ぬいぐるみを抱えたユキ（3歳児）が近づき、海賊船の中を覗き込む。ユキは3歳児スペースにいた1先生の手を引き、海賊船のもとへ誘う。ユキは「おっふろー！」と言い海賊船の中に入った。近くにいたカズキが「海賊船だけだね」と声をかけるが、ユキに反応はなく、さらにタケル（3歳児）も海賊船の中に入った。ユキは「おうちっおうちっ」と言いニコニコ笑っている。1先生はカズキに「海賊船壊さないようにお借りするね」と声をかけ、船に腰かけた。カズキはスッとその場を離れる。タケルがイカリに気づき、ユキがそれをシャワーのようにして遊んでいる。

この事例では、「海賊船」を作った4歳児が降園したり別の遊びに移ったりしたことで、「海賊船」が空き、その時ちょうど緩やかな境を超えて行き来していたユキ（3歳児）が「海賊船」に目を留めた。組み立てられている大きな「海賊船」を、ユキは「おふろ」に見立てて遊び場にする。3歳児の保育スペースには大型積み木はなく、また、それが組み立てられているこの場合は、この時4歳児の保育スペースならではの遊び場である。緩やかな境になり子どもたちの行き来がより活発になる中で、日中とは異なった遊びをする機会が生まれていた。

また、緩やかな境を超えると、子どもたちは他のクラスの物や遊びなどに気がつく。ある事例では、3歳児が5歳児の保育スペースで、ペットボトルで作られたワニを見つけ、「同じものを作りたい」とそのワニを横に置きながら製作を始めた。また、5歳児が3歳児の保育スペースで、新幹線の既成の玩具で遊ぶこともあった。このように緩やかな境の中で生まれた異年齢の空間は、子どもたちの遊びをより多様なものに

で遊び始める。すると、ソウタとヤマトが移動してきてすぐ、それまで4歳児の保育スペースでおうちごっこをしていたカナミとレンが寄って来て、積み木遊びに加わった。カナミとレンは、ソウタとヤマトが並べていた積み木に、一緒になって手を加えていく。

この事例では、保育スペースが区切られたことをきっかけに、カナミとレンが、ソウタとヤマトの積み木遊びに気づき、その遊びに加わった。ソウタとヤマトが遊び場を移動する前は、カナミとレンがおうちごっこをしていた場所から、ソウタとヤマトがL字型の積み木で遊ぶ姿は見えなかった。すなわち、E保育者が場の区切りを設けたことによって、遊び場が変化し、ソウタとヤマトの遊びがカナミとレンの目に留まったのである。

このように保育室が区切られることで、子どもたちの過ごす保育スペースは狭くなり、お互いの様子が目に入りやすくなる。夕方になり、保育室内の人数が徐々に減少することで可能となるスペースの縮小は、子どもたちが他の遊びに気づくきっかけや遊び集団が変わるきっかけになっていた。

②緩やかな境

A園の2階保育室はオープンスペースであり（図3-1）、3・4・5歳児の各保育スペースの境界が完全に区切られるということはほとんどなく、日中でも3・4・5歳児がそれぞれの保育スペースを行き来する姿が見られる。ただ、夕方の保育になると、3・4・5歳児の行き来がより活発なものになる。この各保育スペースの行き来は、保育者が促していることではない。それでも行き来がより活発になる理由の一つとして考えられるのは、日中は学年ごとで広場に移動をしたり、活動をしたりすることがあり、「学年ごと」という意識があるということである。集まりの際には、保育者が、5歳児スペースに来た3・4歳児さんに対して「今は5歳さんの集まりだから他のところで遊んでくれる？」と声をかけることもあった。このような日中の教育課程に係る教育時間に比べて、夕方の保育では「学年ごと」に動くことはほとんどない。それによって、学年の境がより緩やかなものになり、子どもたちの行き来が活発になると考えられる。その中で、異年齢の子どもたちがかかわらなくとも、3歳児が5歳児の保育スペースで遊んだり、4歳児が5歳児の保育スペースにあるおもちゃを使ったりと、異年齢の空間が生まれている。

次に挙げる【事例2】は、学年の境がより緩やかになった異年齢の空間での子どもたちの姿を示す事例である。

①スペースの縮小

A園では、おやつを終了後や在園人数が減少すると、保育者によって保育室の中に区切りが設けられ、保育スペースが縮小されることがある(図4-2)。このスペースの縮小は、決められた時間、決められた空間に縮小されるのではなく、保育者が、保育室にいる子どもの人数や遊びの様子を見て判断し、場の区切りを設置していた。

次に挙げる【事例1】は、保育者Eが場の区切りを設けた際の事例である。



図4-2 5歳児の保育スペースと4歳児の保育スペースとの間に区切りが設けられた例
(左図：16時47分、右図：17時28分)

【事例1】 スペースの縮小により遊び場が変わり、他の遊びや友達に気づく

201X年12月

〈登場人物について: ハヤトたち3人- 5歳児、その他の子どもたち- 4歳児〉

17:00過ぎ、5歳児の保育スペースには、井型ブロックで遊ぶハヤトたち3人と、L字型の積み木で遊ぶソウタとヤマトがいた。

17:30を回り、ブロックで遊んでいたハヤトたちは、オセロをしようとブロックを片づけ始め、その間に4歳児担任のE先生が4歳児の保育スペースの机にオセロを出していた。ハヤトたちは、片付け後、オセロが出された机に移動してオセロで遊び始める。その後E先生は、ソウタとヤマトに「こっちで(4歳児の保育スペースで)遊ぼう」と声をかけ、L字型の積み木とともに2人に移動するよう促した。5歳児スペースから子どもたちがいなくなると、E先生は4歳児の保育スペースと5歳児の保育スペースの間にタオル掛けや衝立を置き、5歳児の保育スペースに子どもたちが入らないよう区切りを設置した。

ソウタとヤマトは、L字型の積み木を箱ごと4歳児スペースに運んできて、再び2人

4. 結果と考察

4-1. 在園人数の変化

はじめに、A園における夕方の保育中の人数の変化を示すために、調査日における4・5歳児の在園人数の変化を図4-1に示した。3～5歳児の保育室はオープンスペースであるが、構造上観察の限界があり、3歳児の降園は記録困難だったため、4・5歳児のみのデータである。夕方の保育中15分ごとの保育室内の人数の平均を出し、年度別にグラフにまとめた。A園の3～5歳児は、各クラス半数が1号認定、半数が2号認定の編成であるため、教育課程に係る教育時間の終了時刻である15:00～15:15の人数の減少は、1号認定児の降園を示している。ここから、A園では夕方の保育中において17:00～18:00の時間帯に降園する園児が多く、特に在園人数の減少の変化が大きいことが明らかにされた。

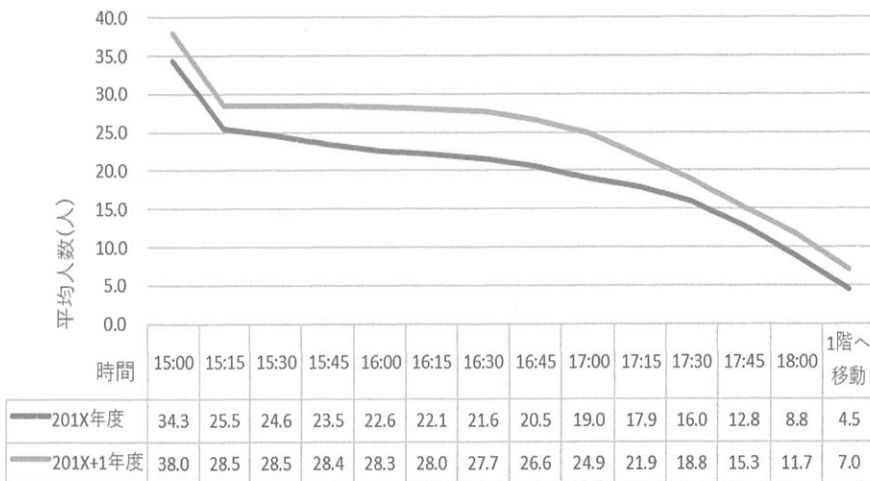


図4-1 A園4・5歳児の在園人数の平均（年度別）

4-2. A園における夕方の保育の環境

A園の夕方の保育における環境について、教育課程に係る教育時間からの変化に着目し抽出した事例を分析した結果、夕方の保育に特徴的な事象として5つのカテゴリーが生成された。本研究で生成されたカテゴリーは、①スペースの縮小、②緩やかな境、③場のゆとり、④物のゆとり、⑤夕方の時間の遊びである。

なお、本研究における調査は、お茶の水女子大学人文社会科学研究の倫理審査を経て、承認を受けている（通知番号：第2019-26号）。

3. 調査対象園A園の概要

3-1. A園の環境

A園の環境として、観察を行った園舎2階の平面図を図3-1に示した。3～5歳児の保育室は学年ごとの保育スペースに分けられているが、オープンスペースとなっている。本調査においてA園の3～5歳児が夕方の時間を過ごしていた場合は、2階保育室、バルコニー、園庭、近隣の広場、玄関前スペースであった。

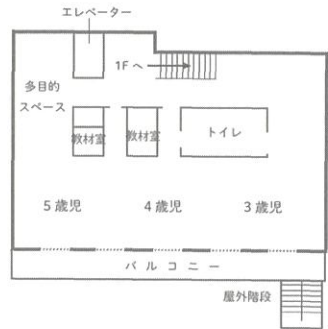


図3-1 A園の園舎2階平面図
資料：A園パンフレット

3-2. A園における一日のおおよその流れ

A園における3～5歳児のおおよその一日の流れを図3-2に示した。A園において、1号・2号認定の子どもたちが共に過ごす「教育課程に係る教育時間」は、3歳児は9:00～13:00、4・5歳児は9:00～15:00である。本研究では15:00以降をA園における「夕方の保育」と定義した。この15:00以降は、3～5歳児の1号認定の預かり保育利用児と2号認定児が混在している時間帯である。

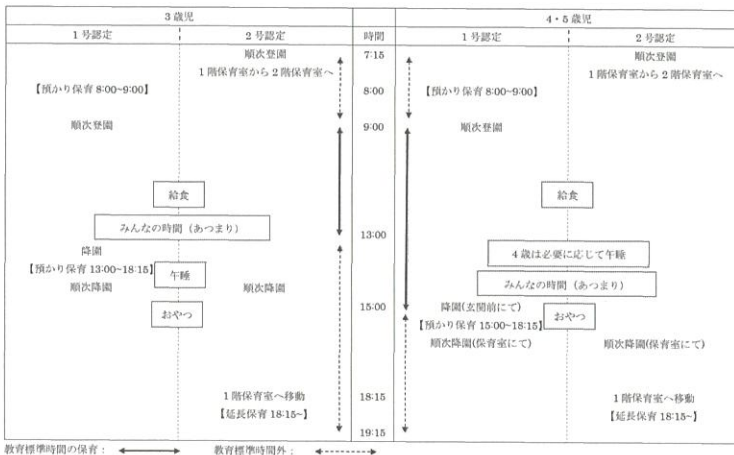


図3-2 A園における3～5歳児の一日のおおよその流れ
資料：A園パンフレット

た研究は管見の限りではない。

そこで本研究では、「教育課程に係る教育時間終了後の生活」における教育及び保育を「夕方の保育」と呼ぶこととし着目する。ある認定こども園において1年間の参与観察を実施し、そのフィールドワークをもとに夕方の保育中子どもたちはどのような保育環境の中で、どのように過ごしているのか、その実態をより詳細に記述することを本研究の目的とする。そこからさらに、夕方の保育中の保育環境に焦点を当て、一部の子どもたちが降園した後の夕方の保育に特徴的な保育について検討を行う。

2. 方法

本研究では、2016年度開設の区立保育所型認定こども園（以下A園）において、201X年10月～201X+1年10月の1年間、週1回程度の頻度で参与観察を実施した。A園は、「夕方の保育」にあたる午後の保育についてのカリキュラム研究を推進しており、本研究に対しても関心を寄せていただいたことから観察のフィールドとした。観察は、3～5歳児が過ごすオープンスペースの保育室において、4・5歳児の1号認定児の降園前から延長保育開始までにあたる14:30～18:15（計38回）の観察を実施した。また、「夕方の保育」の実態について考察する上で参考にするために、教育課程に係る教育時間を含む8:00～15:00（計3回）の観察を追加で実施した。筆者が、観察者の立場で、筆記記録とビデオカメラによる記録を行い、録画データは保育室全体の動きの確認やメモできなかった情報の補填として補助的に用いた。

次に本研究の分析方法を示す。①はじめに、在園人数の減少が夕方の保育における一つの大きな変化であることから、観察可能な4・5歳児の在園人数を記録し、その変化を調べた。②次に、観察によるフィールドノーツをもとに事例を抽出した（計833事例）。事例の抽出では、教育課程に係る教育時間との比較及び、夕方の保育中の環境の変化に着目し、教育課程に係る教育時間においては見られなかった事象や夕方の保育において多く見られた事象を事例として抽出した。③次に、抽出した各事例の分析を行った。まず各事例に対して、どのような事象が夕方の保育に特徴的であるかを明確に示すように、事例を要約した短い説明を付した。そこからさらにその夕方の保育に特徴的な事象を端的に示す語句を付した。各事例に付された語句から近いものをまとめて整理し、それをカテゴリーとして生成した（全20カテゴリー、計763事例）。④そして本研究では、生成されたカテゴリーのうち保育環境に関するもの（全5カテゴリー、計108事例）に焦点を当て、その事象が起こった文脈に着目して事例分析を行い、考察を行った。

論文

子どもたちは認定こども園において夕方の時間をどのように過ごしているのか？
～ 環境と空間に焦点を当てた参与観察による事例分析から ～

杉山 沙旺美*

How do children spend time in the late afternoon at the ECEC center?:
Focusing on the Environment and Space

Saami SUGIYAMA

1. 問題と目的

平成27年度より施行された「子ども・子育て支援新制度」の下、認定こども園の普及が図られてきた。認定こども園化が進められる中で、在園時間が異なる多様な子どもたちの教育・保育をどう進めていくかということが課題の一つとされている（金井・前田・杉山・安田・小松, 2016）。

在園時間が異なる子どもたちが共に過ごす認定こども園では、3～5歳児の場合、教育課程に係る教育時間の活動を共にした後、そこで降園する子どもたちと、園での生活を続ける子どもたちとに分かれることになるため、「子どもの生活リズムに即して別々のねらいやカリキュラムを立てることが必要」となる（高橋, 2017）。また、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』（内閣府・文部科学省・厚生労働省, 2018）でも、第1章第3節において「在園時間の違い等による配慮」について記載され、その具体的な配慮として「教育課程に係る教育時間終了後の生活」への配慮の必要性に言及している。

「教育課程に係る教育時間終了後の生活」について、これまでの研究では、保育者にとっての懸念の一つとして挙げられ（矢藤ほか, 2017）、認定こども園の課題の一つとしてその議論の必要性が主張されてきた（金井ほか, 2016；高橋, 2017）。一部の実践報告では、教育課程に係る教育時間とは異なるその時間ならではの良さを見出した実践が報告されている（木村, 2017；池本, 2016）。しかし、「教育課程に係る教育時間終了後の生活」に焦点を当て、その実態について記述し、保育的観点から検討し

*（すぎやま さおみ）お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科博士後期課程

『幼児の教育』 令和2年 総目録

◇春号

じつと見ることから 伊集院理子

保育の「根本考察」にチャレンジ！ 11

「暮らし」の視点で保育を見直す「創り

・子どもが過こす場所に「創り手」が

いることの意味を探る

・「幼児の美術教育」スケッチをしなが

らのメモー

(1961年) から

私の保育ノート「楽しい」「うれしい」が

つながる保育 伊藤ほのか

保育をつなぐ「お茶の水女子大学附属

幼稚園からの発信」vol.5

ナーサリーと幼稚園「おやま」で

つながる 中澤智子

子ども学の窓から これからのチャイ

ルド・スタディーズを展望して①

「子どもと医療と保育」の学び 松島のり子

ノルウェー保育施設訪問記 雨と共に

風と共に 松田こずえ

OMEPAアジア・太平洋地域大会から

の発信 上垣内伸子

OMEPA京都大会に参加して(その1)

保育・幼児教育におけるSDGsと

ESD 光橋翠・土谷香葉子

鎌倉おもちゃ屋物語その5 黒須和清

幼児期の教育における身体表現の課題

ー「女子体育」誌(2000年4月号

(2019年3月号)に掲載された

実践報告を通してー 渡邊孝枝

◇夏号

世界が一つになるときに 宮里曉美

保育の「根本考察」にチャレンジ！ 12

「暮らし」の視点で保育を見直す

ー音を感じる

・暮らしの中の「音」について

私の保育ノート 幼稚園が取り組む2

歳児保育 藤本明弘

保育をつなぐSDGs 保育と子育てのあ

る暮らし 伊藤綾子

子ども学の窓から②

生涯学習として保育を学ぶということ

ーECCCEL社会人プログラムの今ー

浜口順子

オリンピックと幼児期のスポーツ

新名謙二

タイ乳幼児発達支援のこれから パン

コク訪問記 山崎寛恵

OMEPA京都大会に参加して(その2)

保育・幼児教育における遊び(P1

ay) 岡南愛梨・杉山沙旺美

鎌倉おもちゃ屋物語その6 黒須和清

幼児教育における「子どもの生活にお

ける秘密の場所」の意味 荒井聡史

◇秋号

今、ここで、新たに考えること

上坂元絵里

保育の「根本考察」にチャレンジ！ 13

「暮らし」の視点で保育を見直す

ー食を考える

・暮らしの中での「食」の体験

「児童の辨當」

(1911年) から

私の保育ノート 寄り添うことと表現

砂守頼子

実践ファイル 3園合同研究会の取り

組みから その1 日々の生活の中

でのつながり

佐々木麻美・杉浦真紀子

保育をつなぐvol.7 職員室ー子どもたち

の振り返り 嶋田博美

子ども学の窓から③

社会の視点から考える幼児教育の試み

小玉亮子

日本語で外国人と付き合う 長田恵子

ニューヨークでの保育園・幼稚園選び

の経験 宝月理恵

鎌倉おもちゃ屋物語その7 黒須和清

育児雑誌「ひよこクラブ」における子ど

もを預けることに関する言説の変化

栗原結海

◇冬号

春を待ち、春を思う 宮里曉美

保育の「根本考察」にチャレンジ！ 14

「暮らし」の視点で保育を見直す

ー「コロナ」と保育

・今、大切にしたい私たちの「暮らし」

・「月の衛生」

(1942年) から

私の保育ノート 変わっていくこと

興柁侑

保育をつなぐvol.8 新しくつくる

「新型コロナウイルス感染症予防の中

での日常」

佐藤寛子

子ども学の窓から④

見つけて・驚いて・気づいたことか

ら始まる保育 宮里曉美

子どもには密が必要 仙田満

生活文化と「お花屋さん」 松山誠

シンガポールでの季節感と伝統行事

富田裕香

鎌倉おもちゃ屋物語その8 黒須和清

子どもたちは認定こども園において夕方

の時間をどのように過ごしているの

か? ー環境と空間に焦点を当てた

参与観察による事例分析から

杉山沙旺美

『幼児の教育』 令和2年 総目録

お便り

POST

◇私の「カルチャー・いんふお」◇

「家で亡くなるということ」

谷川健三さんと洋子さん親子のお話です。洋子さんは父親を自宅で介護しています。洋子さんは全盲で、健三さんは末期の肺がんを患っています。NHKスペシャル「大往生 わが家で迎える最期」（2019年）でも、その後の映画『人生をしまう時間（とき）』（2019年 下村幸子監督）でも見た洋子さんは少女のような純真な感じで、老いて寝たきりの父親を介護しているようには見えません。『いのちの終いかた』（下村幸子著 NHK出版 2019年）によると、洋子さんは幼い頃に視力を失うも亡きお母様とお父様にかわいがられて育ち、盲学校で取得したマッサージ技術で父親の体をよく揉んでいました。父親の読む新聞記事を点字翻訳したり、お母様が病に倒れた後は健三さんが妻と娘の面倒を看続けました。そして父親が倒れた後は洋子さんが、親戚に助けられながら食事作り、体の世話もしました。そして最期の時も、「呼びかけても返事がない」と、担当に連絡しました。そしてこの親子の自宅での介護生活を支えたのは埼玉の新店にある堀/内病院の地域医療センターです。父が寒いと欲しがったのに毛布を取り出せず、「私をいじめないで」と泣いたと悔やんで話す洋子さんを、小堀医師は慰めます。「泣いてもいい、一生の付き合いはきれいごとじゃない、いつも通りの自然な形のお別れがいいんです」と。そして洋子さんは、父親と暮らした家に住み続けたい、医学が進んで視力が戻るなら父親が売った車を買戻して両親と行ったお店に買い物に行きたいと話します。小堀先生と健三さんが交わす庭のおいしい百目柿をめぐる会話も温かく心に残ります。

参考：小堀嶋一郎『死を生きた人びと』（みすず書房 2018年） (AK)

◆研究論文を募集します◆

ピアレビュー（査読）の上、掲載します。

本誌の巻末、横書き部分の「探究」ページに掲載する論文を募集します。

【テーマ】子ども、保育、幼児教育に関するもの

【文字数等】12,500～13,000字程度（日本語）。

（写真・図表、文献、注を含む）

本文はワード原稿で作成してください。編集上適宜対応しますが、投稿予定の方は下記のアドレスまでメールでご相談ください。

【締め切り】随時募集します。

【送付先】本誌編集委員会

Mail : youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

◇年間購読継続手続きのお願い◇

いつもご愛読くださり、ありがとうございます。

次号春号からの年間購読を引き続きご希望の方は、更新手続きが必要となります。フレール館のホームページに入り、オンラインショップ「つばめのおうち」のバナーをクリック。その後、「定期購読」⇒「幼児の教育」の表紙絵をクリックします。

定期購読のサイクルは冬号で一区切りになります。ご不明の点などございましたら、youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp までお問い合わせください。

おかげさまで今年も無事に4号をお届けすることができました。今後ともどうぞお引き立てくださいますようお願い申し上げます。

（編集委員会）

編集後記

この冬号の編集後記を書いている今は2020（令和2）年9月12日朝。日時を記すのはやはり、後の時代になって本誌が特筆すべきエポックの資料として読み直されるかもしれないと思うからだ。新型コロナウイルスの感染拡大と苦闘「していた」（いつ過去形になるのだろうか）時期のこの号がいつかアーカイブズで読み返される頃の日本は、世界は、どのようになっているか。今年の春号が発行された4月、日本では非常事態宣言が発令され、全国の幼稚園・保育所等の施設では臨時休園もしくは限定的な保育形態での生活が強いられることとなった。5月末に宣言は解除されたが、現在もお嚴重な健康チェック、消毒やマスクの着用、ソーシャルディスタンス

などへの注意や配慮に現場は明け暮れ、保育者は持続させねばならない緊張感と戦いながら、なるべく平常に近い雰囲気を保とうと日々努力を重ねている。幼児たちもまた、その現実を受け入れ、懸命に日常を生きているに違いない。

特集座談会で、ドイツと日本の園がコロナ禍の中をそれぞれどのように過ごしているか、生き生きとお伝えしている。オンラインによって外国とのディスタンスがこれほど縮まったというのは驚きでもあり、「災い転じて」の一側面であろう。建築家・仙田氏による年代別生活様式の提言は、反・密による保育危機を真摯に鋭く捉えた具体的な指針で、保育のインサイダーには非常に有難く響く。(HJ)

次号予告 幼児の教育 春号 2021年4月刊行予定

創刊120周年。歴史を生きし「今」の保育をどうするか。

◇『幼児の教育』120周年特集 1

座談会 本誌の120年の歴史を現代にどう生かすか
倉橋和雄・久保健太・阿部祐美子・宮里暁美・浜口順子

◇新連載 「育ての心」で語りあう ～動画を囲んだデジタル時代のカンファレンス～

鈴木秀弘・池永憲彦・久保健太

◇好評連載 鎌倉おもちゃ屋物語9 くろすかずきよ

※タイトル内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 冬号 第120巻 第1号

令和3年4月1日発行
編集発行人／浜口順子
編集担当／田中恭子
発行所／お茶の水女子大学
『幼児の教育』編集委員会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学
浜口順子研究室内
youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

発売所／株式会社フレーベル館
電話：03-5395-6604（編集）
振替／00190-2-19640
印刷所／図書印刷株式会社
定価／本体880円＋税
◎お茶の水女子大学『幼児の教育』編集委員会
2021 Printed in Japan 無断転載禁止
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

編集委員／上坂元絵里
菊地知子
松島のり子
宮里暁美
お茶大3園合同研究会
（附属幼稚園、
いずみナーサリー、
文京区立お茶大こども園）
編集協力／フレーベル館

● ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613（営業）●

無藤 隆、大豆生田啓友監修
**子どもの姿ベースの指導計画が
 スラスラ書ける！**

子どもの姿ベースの
新しい指導計画の考え方
 新要領・指针对応

無藤 隆、大豆生田啓友／編著
 高嶋景子、三谷大紀、北野幸子、齊藤多江子、
 松山洋平、和田美香／執筆

指導計画の考え方をマンガやイラストでわかりやすく
 解説した理論編

96 ページ 26×21cm 定価 本体 2,408 円＋税
 109-74 ISBN978-4-577-81468-0



0・1・2 歳児
 子どもの姿ベースの**指導計画**
 新要領・指针对応

無藤 隆、大豆生田啓友／編著
 高嶋景子、齊藤多江子、和田美香／執筆
 子どもの姿からつくる指導計画の考え方と、0・1・2 歳児
 の年間計画・月案・資料を掲載

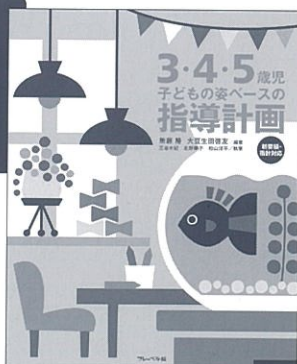
192 ページ 26×21cm 定価 本体 2,900 円＋税
 109-75 ISBN978-4-577-81469-7



3・4・5 歳児
 子どもの姿ベースの**指導計画**
 新要領・指针对応

無藤 隆、大豆生田啓友／編著
 三谷大紀、北野幸子、松山洋平／執筆
 子どもの姿からつくる指導計画の考え方と、3・4・5 歳児
 の年間計画・月案・資料を掲載

192 ページ 26×21cm 定価 本体 2,900 円＋税
 109-76 ISBN978-4-577-81470-3



遊びが育つ 保育

～ごっこ遊びを通して考える

共編著 / 河邊貴子 (聖心女子大学)
田代幸代 (共立女子大学)

子どもたちにとって身近な遊びである「ごっこ遊び」に焦点を当て、園での遊びを引き出し、盛り上げる環境の在り方、保育者の援助など優れた実践事例から具体的な方法を紹介。

3歳児から5歳児の子ども達の発達と遊びの発達を写真やイラスト、図表などを豊富に使って解説します。

遊びが育つ保育

～ごっこ遊びを通して考える

保育者ゼミック

河邊貴子 (聖心女子大学)
田代幸代 (共立女子大学)

遊びを中心とした保育を豊かに展開するために



乳幼児期の子どもにとって重要な「遊び」、それをどう育てるか「ごっこ遊び」に焦点を当て、具体的な事例からポイントを解説!

定価本体 1,800 円 + 税 全 80 ページ
26×18cm 109-88 ISBN978-4-577-81488-8

5歳児
友だちの良さを学びながら
目的を共有して遊びを進める
「ごっこ遊び」(10月～12月)

園児は、友達と遊ぶことで、自分の良さを学び、友達の良さを学ぶことができます。また、目的を共有して遊ぶことで、遊びを進めることができます。

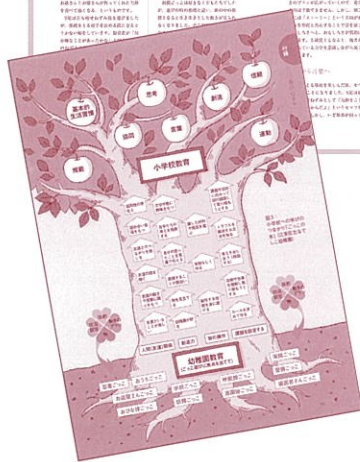
1. 目的を共有する
2. 遊びを進める
3. 友達の良さを学ぶ
4. 自分の良さを学ぶ

保育者の役割のポイント

子どもの役割のポイント

環境を整えるポイント

保育者は、子どもの遊びをサポートし、環境を整えることが重要です。



CONTENTS (一部抜粋)

- 1章 なぜ、ごっこ遊びは大切な?
 - 遊びの大切さ
 - これからの保育と遊び
 - 遊びの総合性と「10の姿」
 - ごっこ遊びに焦点化
 - ごっこ遊びの意義
- 2章 ごっこ遊びの発達
 - 3歳児～5歳児の具体的な事例
- 3章 ごっこ遊びを支えるポイント
- 付録 ごっこ遊び Q&A

定価 本体八八〇円十税